

沼夫人

泉鏡花

青空文庫

「ああ、奥さん、」

と言つた自分の声に、ふと目が覚めると……室内まのうちは真暗まっくらで
 黒白あやめが分らぬ。寝てから大分の時が経たつたらしくもあるし、つい
 今しがた現うとうと々したかとも思われる。

その現々たるや、意味のごとく曖昧あいまいで、虚気うっかりとしていたの
 か、ぼうとなつていたのか、それともちよいと寝たのか、我なが
 ら覚おぼつか束ないが、

「ああ、奥さん、」

と返事をした声は、たしか確に耳に入いつて、判然聞こえて、はツと
一ツ胸を突かれて、からだ身体のどつかが、がつくりと窪くぼんだ気がする。
そこで、この返事をしたのは、よくは覚えぬけれども、何でも、
誰かに呼ばれたのに違ちがいない。——呼んだのは、室の扉ひらきの外から
だった——すなわち、ねや閨の戸を音訪おとずれられたのである。
但し閨の戸では、この室には相応そぐわぬ。寝ているのは、およそ
十五畳ばかりの西洋室ま……と云うが、この部落における、ある国い
手しやの診察室で。

小松原は、旅行中、夏ひとよの一夜を、知己ちかづきの医学士いの家いに宿つた
のであつた。

隙間漏る夜半よわの風に、ひたひたと裙すその靡なびく、薄黒い、ものある

影を、おくびよう臆病のために嫌うでもなく、さればとて、むらがたか群り集る蚊くちばしの嘴を忍んでまでいと厭うほどこじれたのでもないが、うつとう鬱陶しさに、余り蚊帳を釣るのを好まず。

ちとやそつとの、ぶんぶんなら、夜具の襟を被つても、成るべくは、かやくさ萱草、行抜けに見たいりようけん了簡。それには持つて来いの診察室。かざり裝飾の整つたものではないが、張詰めた板敷に、どうにか足袋はだし跣足である歩行かれるじゆうたん絨氈が敷いてあり、窓も西洋がかりで、一雨欲しそうな、色のやや褪あせた、緑の窓カーテン帷が絞つてある。これさえ引いておけば、たんぼ田圃は近くつても虫の飛込む悩みのないの、窓も一つ開けたまま、小松原は、昼間はその上へ患者を仰臥あおむかせて、内の国手せんせいが聴診器を当てようという、ねだい寝台の上。

ますます妙なのは蚤のみうれいの憂更うれいになし。

地方いなかと言つても、さまで辺鄙へんびな処ではないから、望めばある、

寝台の真上の天井には、瓦斯がすが窓越の森に映つて、薄ら蒼あおくぱつと点ついていたつけが、寝しなに寝台の上へひよいと突立つたつて、捻ねじつて、ふつと消した。

「何、この方が勝手です、燧火マツチを一つ置いといて頂けば沢山で。」

この家やの細君は、まだその時、宵に使つた行水の後の薄化粧に、汗ばみもしないで、若々しい紅あかい扱しごき帯、浴衣にきちんとしたお太鼓の帯のまままで、寝床の世話をして、洋燈ランペをそこへ、……

「いいえ、お馴なれなさらないと、偶ふとお目覚めの時、不可いけいもんですよ。夫やどでもついこの間、窓を開けて寝られるから涼しくつて

可いいてつて、此室ここへ臥ふせりましてね、夜中よなに戸迷とまいをして、それは
 貴下あなた、方々あちこちへ打附ぶつかりなんかして、飛とんだ可笑おかしかったことがござ
 んすの。

可笑おかいより、貴下あなた、ひよんな処ところへ顔かほを入れて、でもまあ、男で
 したから宜よろしかつたようなもの、私わたくしどもだつたらどうしましよ
 う。そこにございます、それですわ。同じおなじような切きを掛かけて蔽おおいに
 しておくもんですから、暗くさは暗くし、扉かどの処ところが分わりませので、
 何なにしろ、どこか一つ窓まどへ顔かほを出でして方角かたかくを極きめようとしてしましね、
 窓掛まどかだ、と思おもつて引揚ひきあげましたのが、その蔽かきだつたんでしよう。
 箱はこの中に飾かざつておきます骸骨がいこつに、ぴったり打撞ぶつかつたんでござい
 ますとき、厭いやではござんせんかねえ。」

……と寝台の横手、窓際に卓子テエブルがあるのに、その洋燈ランプを載せながら話したが、中頃に腰を掛けた、その椅子は、患者が医師せんせいと対向さしむかいになる一脚で、

「何ぼ、男でもヒヤリとしましたそうですね。」

と愛嬌あいぎょうよく莞爾にっこりした。

「や、そりゃ、酒田さん驚いたでしょう。幾ら商売道具でも暗やみで打撞つちや大変だ。」

「ですから、お気を注つげなさいまし。夫やどとは違つて、貴下はお人柄でいらつしやるから、またそうでもない、骸骨さんの方から夜中に出掛けますとありません。……おんな婦のだつて、言いますから。」

主人あるじの医学士は、実は健康を損ねたため、保養かたがた暢気のんきを
専一に、ここに業を開いているのであるが、久しぶりのこの都の
客と、対談はなしが発奮はずんで、晩酌の量を過したので、もう奥座敷で、
ごろりと横の、そのまま夢になりそうな様子だった折から、細君
もただそれだけに、

「どうぞ御ご緩ゆっくり。」

と洋燈ランプを差置き、ちらちらと——足袋つまさきじゃない、爪先つまさきが白く、
絨氈じゅうたんの上を斜めに切つて、扉ひらきを出た。

しばらくして、女中が入つて来て、

「ここへ、冷水をお置き申します。」

声を聞いたばかり。昼間歩行き廻った疲労と、四五杯の麦酒の酔に、小松原はもう現々で、どこへ水差を置いたやら、それは見ず。いつまた女中が出て去ったか、それさえ知らず。ただ洋燈の心を細めた事は、一緊胸を緊めたほど、顔の上へ暗さが乗懸ったので心着くと、やがて、すうすう汐が退く塩梅に、灯が小さく遠くなり、遙に見え、何だか自分が寝た診察台の、枕の下へ滅入込んで、ずっと谷底の古御堂の狐格子の奥深く点れたもののごとく、思われた……か思ったのか、それとも夢路を辿る峠から覗く景色か、つい他愛がなくなる。

処を、前に言った、（奥さん）——で目が覚めたが、真暗、

洋燈はその時消えていた。

枕を擡^{もた}げて、

「唯^{ただいま}今！」

威勢よく、（開けます）とやろうとする、その扉^{ひらき}の見当が附かぬから、臥床^{ねどこ}に片手支^ついたなり、熟^{じつ}と室^まの内^{みまわ}をしながら、耳を傾けると、それ切り物の氣勢^{けはい}がせぬ。

「はてな、」

自分で、奥さん、と言ったのに、驚いて覚めたには覚めたが、誰に呼ばれたのか、よくは分らぬ。もつとも、小松原とも立^{りゆうじ}二^にとも、我が姓、我が名^{めい}を呼ばれたのでもなければ、聞^{きき}馴れた声で、貴郎^{あなた}、と言われた次第でもない。

とは言え、呼んだのは確たしかに婦おんなで……しかも目のぱっちりした――

「待て、待て、」

当人寝惚ねぼけている癖ひとに、他の目色めつきの穿鑿せんさくどころか。けれども、その……ぱっちりと瞳すずの清すずしい、色の白い、髪かみの濃い、で、何に結むすったか前髪まへかみのふつくりとある、俯うつむ向き加減かへんの、就なかんずく中ちゆう、歴ありあ然りと目に残のこるのは、すつと鼻筋はなぢの通とつた……

ここまで来ると、この家やの細君こはるの顔かほではない。それはもつと愛あ嬌いきようがあつて、これはそれよりも品しんが優ある。

勿論もちろん、女中にようぢゆうなどに似にようはないと、夢ゆめか、現うつか、朦朧もうろうと認めた顔かたちの容かたちが、どうやらこう、目前めききに、やつぱりその俯うつむ向き加減かへんに、

ちらつく。従つて、今声を出した、奥さんは誰だか知れるか。

それに、夢中で感覺した意味は、誰か知らず、その女性によしようが、

「開けて下さい。」

と言つたのに応じて、唯今、と直ぐに答えたのであるが、扉ひらきの事だろうか？ その外廊下に、何の沙汰さたも聞えないは、待て、そこではなさそう。

「他ほかに開ける処と言つては、窓だが、」

さてはまさしく魘うなされた？ この夜更けに、男が一人寝た部屋を、庭から覗のぞきこ込んで、窓を開けて、と言う婦おんなはあるまい。

いや、無いとも限らん——有れば急病人とこの許とこから駈かけつ着けて、門をたた敲たたいても、内で寝入込んで、車夫をはじめ、玄関でも起さない

処から、等閑なおよりな田舎の構かまえ、どこか垣の隙間から自由に入つて来て、直ぐに脊伸せいのびで覗のぞいた奴やつ。

かとも思つたが、どちらを視ながめても、何も居おらず、どこに窓らしい薄明りも射ささなければ、一間開放した筈はずの、帷カーテンの戦そよぎも見えぬ。

カタリとも言わず……あまつさえ西洋室まの、ひしとあり、寂しんとして、芬ぶんと、脳こころへ染くる、強い、湿ぬっぽい、重おもくなるしい葉はの匂におが、形ある箔はくのように颯さつと来て、時にヒイヤリと寝台を包む。

渠かれは、今更ながら、しとど冷汗になつたのを知つた。

窓を開けたままで寝ると、夜気に襲われ、胸苦しいは間々あるならい習なで。どうかすると、青い顔が幾つかさなも重つて、隙間から差さ覗のぞいて、ベソを搔かいたり、ニタニタと笑つたり、キキと鳴声を立てたり、その中には鼠も居る。——希代なのは、その隙間形すきまなりに、怪しい顔が、細くもなれば、長くもなり、菱形ひしがたにも円くもなる。夕顔に目鼻が着いたり、摺すりこぎ木に足が生えたり、破障子やぶれが口を開けたり、時ならぬ月が出いでなどするが、例えば雪の一片ひとひらごとに不思議の形があるようなもので、いずれも睡眠に世を隔つ、夜の形の断片かけららしい。

すると、今見た女の顔は……何に憑ついて露あらわれたらう。

「何だか美しかった。」

と思出して、今度は悚然ぞっとした。

「そして、奥さんだ？……奥さんとはどこの奥さんだ。」

確たしかに此家ここの細君の顔ではない、あれでなし、それでもなし、目

がぱっちりして、色が白く、前髪がふつくりと、鼻筋通り……

と胸の裡うちで繰返して、その目と、髪と、色いろつや艶と、一つ一つ絡まと

まり掛けると……覚おぼえがある！

トンと寝台ねだいに音を立てて、小松原は真暗まっくらな中に、むつくと起

きた。

「馬鹿な。」

と思わず眩つぶやいた。

「何、そんな奴やつがあるものか。」

いや、いや、もしその人だとすれば——三年前に別れてから、片時も想わずにはおらぬ、寝た間も忘れはしないのであるから、幻も、その俤おもかげは当あたり然まえで、かえつて不いぶ審かしくも凄すげくもない筈はず。

「開けて下さい、」

と云つた……それそれ、扉ひらきを開けるつもりで、目を覚さましたに違ちがいはない。

且かつつ現うつから我われに返つた、咄とつ嗟さには、内の細君で……返事をしたが、かくの通り、続いてちつとも音沙汰のないのを思え。対さ手きは何でも、小松原自分の目には、皆胸みんなにある、その人の俤おもかげに見えるのかも知れぬ。

「どこを、何を開けて、と云つたんだらう。」

一体——と渠はまた熟じつと考くえた。

既に夢だと承知しながら、なお何か現在に、事を連絡させようとしてゐる内が、その実、現うつつだつたものらしいが。

窓は開ひらききいてゐるし、扉の外おとずれは音信は絶えたり、外ふたに開けるものは、卓テエフル子の抽斗ひきだしか、水差の蓋……

いや、有るぞ、有るぞ、棚の上に瓶がある。瓶も……四つ五つ

並んでいたらう。内の医せんせい師が手あかんぼにかけたという、嬰児アルコの酒

精オールに浸つけたのが、茶色に紫がはだかつて、黄色い膚かばまだらに褐斑しの汚

点みが着いて、ぐたりとなつて、狗いぬの児こか鼠の児こかちよいとは分わら

ぬ、天窓あたまのひしやげた、鼻と口と一所ふざまに突き出た不状ふざまなのが、前

のめりにぶくりと浮いて、膝を抱いて、呀！ と一つ声を掛ける
 と、でんぐりかえしを打ちそうな、彼これ大小もあつたけれども、
 どれが七月兎か、六月兎か、ななつきご むつきご 昼間見た時、せんせい 医師の説明をよく
 は心にも留めて聞かなかつたが、海鼠なまこのような、またその岩のふ
 やけたような、厭いやな膚はだ合あ、ぷつりと切つた胞衣えなのあとの大きな
 疣いぼに似たのさえ、今見るごとく目に残る、しかも三みつ個。

と考え出すと、南無三寶なむさんぼう、も一つの瓶びんには蝮まむしが居たぞ、ぐるぐ
 ると蝮局とぐろを巻いた、胴腹どうぶくが白くよじれて、ぶるツと力を入れたよ
 うな横筋あおぐまの青隈くぼが凹くぼんで、逆鱗さかうろこの立つたるが、瓶びんの口へ、
 卜達とくく処とに、鎌首もたを擡もたげた一件、封じ目いきおいを突出る勢。

「一口どうかね。」

と串戲じょうだんに瓶の底を傾けて、一つ医師せんせいが振った時、底の沈よ澱どみがむらむらと立って、煙けむのように蛇身を捲まいたわ。

場所が場所で、扱う人が扱う人だけ、その時は今思うほどでもなかつたが、さてこう枕まくらもと許もとにずらりと並べて、穏かな夢の結ばれそうな連中は、御一方もお在いでなさらぬ。

ああ、悪い処へ寝たぞ。

中にも件くだんの長物ながものなどは、かかる夜更よふけに、ともすると、人の眠ねむりを驚かして、

「開けて下さい。」

を遣やりかねまい、と独りで拵こしらえて、独りで苦笑した。

四

寢覚ねざめの思いの取留め無さも、酒精アルコオル浸づけの蝮まむしが、瓶の口をば開けて給たべ、と夢枕に立った、とまでになる、と結句おかし可笑く、幻に見た婦おんなの顔が、寝た間も忘れぬその人を、いつもの通り現うつに見たと合点あつちが行くと、いずれ一まず安心が出来たので、そのまま仰向あおむけに、どたりと寝た。

急に起上ったのであるけれども、さまで慌あわただしくもなかつたらしく、枕は思つた処にちやんとある。ここで、枕の位置が極きまると、寢台ねだいの向むきも、室まの工合ぐあいも、方角も定まつたので、どの道暗がりの中を、盲目めくら覗のぞきではあるが、扉ひらき、窓、卓子テエブル、戸棚の在あり所どころ

などがしつかり知れる。

上に、その六月目、七月目の腹籠はらごもり、蝮が据置かれた硝子戸がらす

棚は、蒼筋あおすじの勝つたのと、赤い線の多いのと、二枚解剖かいぼうの図

を提げて、隙間一面、晃々きらきらと医療器械の入れてあるのがちようど

搔卷かいまきの裾すその所、二間の壁に押着おっつけて、直ぐ扉ひらきの横手に当る。そ

こには明取りあかりも何にもないから、仄ほのかな星ほし明あかりも辿たどれないが、昼

の見覚みおぼえは違うまい。同じ戸棚が左右に二個ふたつ、別に真中まんなかにずつ

と高いのを挟んで、それには真白まっしろな切きれが懸かかつていた、と寝乱れ

た浴衣の、胸越むねこに伺うかがう……と白い。茫ぼうと天井から一幅ひとば落ちたが、

四辺あたりが暗くて、その何にも分らぬ……両方の棚に、ひしひしと並

べた明晃こうこう々たる器械のありとも見えぬ、寂しんとなつて隠れた処は、

雪に埋もれた閑らしく、霜夜の刑場とも思われる。

旅行の袂たもとに携えた、誰かの句集の中にでもありそうなのを、偶然目に浮べたは可よかつたが、たちまち、小松原は胸を打った。

本尊！ 本尊！ 夢を驚かした本尊は、やあやあその中に鎮座
 まします——しかも婦おんなの骸骨がいこつで、その真白まっしろな蔽おおいの中に、襟脚
 を釣うつつむるようにして、ぶら下げた、足をすつと垂れて、がつくりと
 俯向うつむいたのが、腰、肩、蒼白あおしろく繫つながって、こればかり冷たそう
 に、夕陽を受けた庭の紫陽花あじさいの影を浴びて、怪しい色を染めたの
 を見た。

もうこの上には、仇あだ情なさけ、貴下あなた、私も無さそうな形ながら、婦おんな
 というだけ、骨の細りと、胸あたりの辺も慎おとがましやかに、頤かを搔か込んだ

姿を、仔細らしく視めたが、さして心した、というでもなかつたに、余程目に染みたものらしく、晩飯の折から、どうかした拍子だった、一風颯と——田舎はこれが馳走という、青田の風が簾を吹いて、水の薫が芬とした時、——膳の上の冷奴豆腐の鉢の中へ、その骨のどの辺かが、薄りと浮いて出た。

それから前は、……寝しなに細君が串戯に、

「夜中に出掛けますかも知れません、婦だつて言いますから。」

と笑つたが、話が陽気で、別に気にもならず寝た。処を、今のその婦が来て……

「ほい、蝮より、この方が開けてくれに縁がある。」

いや、南無阿弥陀仏、縁なんぞないのが可い、と枕を横に目を

外そらすと、この切きれがまた白い。襟えり許もとの浴衣おなが白い。同一色なじなのが、何となく、戸棚おおいの蔽おおいに、ふわりと中なだるみみがしつとも続いて、峠ゆきみちの雪路ゆきみちのように、天井裏てんじやうまで見上げさせる。

小松原こまつがはらはまた肩かたのあたりあたりに、冷ひやい汗あせを垂たら々たらと流ながしたが、大分おほい夜よも更さらけた様子ようすで、冷ひや々ひやと、声こゑもない、音ねもせぬ風かぜが、そよりと来きては咽のど喉のどを掠かすめる。

ごほんと、乾から咳せきを咳せいて、搔か卷まききの襟えりを引張ひつばると、暗くらがりりの中に、その袖そでが一ひと波なみ打うつて煽あおるるに連つれて、白しろい蔽おおいに、襞ひだが入いって、何なにだか、呼い吸きをするするように、ぶるぶると動うき出いす。

目めを塞ふさいふでも、こんな時は詮せんがないから、一層いちじやうまた起直おこつて、確しかと、その実じつは蔽おおいが見みえるのでもなく、勿論もちろん揺ゆれるのでもない、

臆おくび病びょう眼まなこが震えるのを、見定めようと思つたが、頭が重いのに、まぶた瞼がだるく、耳が鳴る。手足もぐったりで、その元氣が出ぬ。ままよ、寝つちまえ！　ぐツと引ひ被かぶると、開いたのか、塞いだのか、分別が着かぬほど、見えるものはやつぱり見えて、おまけに、その白いものが、段々拡がつて、前へ出て、押お立たつて、まざまざと屏びょうぶ風を立てたように寄つて来る。

五

さあ、その、ふわふわと縦に動く白いものが、次第びく低くに、耐た力わいなく根を抜いて、すつと搔か卷まきの上へ倒れたらしい心地がすると、

ひしひしと重量が掛つて、うむ、と圧された同然に、息苦しくなつたので、急いで、匆退けに懸ると、胸に抱合させている手が直ぐに解けず、緊着けられているような。

腕を引っこ抜く勢で、腕いて、搔卷をぱつと剥ぐ、と戸棚の蔽は、旧の処にぼうと下つて、何事も別条はない。が、風がまたどこからか吹いて来て、湿っぽい、蒼臭い、汗蒸れた匂が、薬の香に交つて、むらむらとそこらへ泳ぎ出す。

疲れ切つた脳の中に、その臭気ばかりが一つ一つ別々に描かれて、ああ、湿っぽいのは腹籠りで、蒼臭いのは蝮の骸、汗蒸れたのは自分であろう。

そのにおいを見附けたそうに、投出している我が手をはじめ、

きよろきよるとみまわす内に、何となくほんのりと、誰だか、おんな婦の、冷い黒髪の香がしはじめる。

香のする方を、じっ熟と見ると、ただやっぱり白い……が、思いなしか、その中に、どうやら薄墨で影がさして、乱しもやらず、ふつくり鬢が纏びんまとまつて、濃い前髪の形らしく見分みわけがつく、と下から捲まき上がるごとく、白い切きれが、くるくると小さくなり、左右から、きりりと緊しまつて、細くなつて、その前髪を富士形に分けるほど、鼻筋がすつと通る。

「奥さん！」

と思わず言つて、小松原はまた目を覚した。

トもまだ心着かないで、

「今、開けます。」

と言つて、愕然がくぜんとして我に返つた。

「また、夢か。」

今度は目が覚めつつも、まだ、その倅おもかげが室まの中に朦朧もうろうとして残つたが、吻ほと吐つく呼吸いきにでも吹遣ふきやられるように、棚の隅へ、すつと引いて、はつと留まつて、衝つと失なくなる。

後がたちまち真暗まつくらになるのが、白ひの一重芥子ひとえげしがぱらりと散つて、一ひとひら片葉とまの上に留りながら、ほろほろと落ちる風情。

「こりや、どうかしているな。」

現うつと幻との見境みさかいさえ附きかねた。その上、寒気はする、頭かしらは重し、いや、耐たまらぬほど体だるが怠い。夜が明けたら、主人の一診を

煩わそうまでは心着いたが、先刻さつきより、今は起直る力がない。

特に我慢のならぬのは、呼吸いきぐる苦しいので、はあはあ耳に響いて、
 気の怯ひけるほど心臓の鼓動が烈はげしくなつた。

手を伸ばすか、どうにかすれば、水差に水はある筈はず、と思いな
 がら、枕を乗出すさえ億劫おつくうで、我ながら随意ままにならぬ。

ちようど、この折だつたが、びしよびしよ、と水の滴るような
 音がし出した。遠くで蚊の鳴くのかとも聞えるし、鼠ねずみが溢こぼしたか
 とも疑われて、渴いた時でも飲みたいと思ふような、快い水の音お
とずれ
 信ではない。

陰気な、鈍い、濁つた——厭果あきはてた五月雨の、宵の内に星が見
 えて、寢覚にまた糠雨ぬかあめの、その点滴したたりが黴かびた畳に浸込しみこむ時の

——心細い、陰気でうんざりとなる気勢けはいである。

「水差が漏るのかな……」

亀裂ひびでも入いつていたろう。

「洋燈ランプから滲出しみだすのか……」

可厭いやな音だ。がそれにしても、石油の臭においがするでもなし……こ

う精神が濛もつとしては、ものの香は分るまい。

断念あきらめるつもりにしたけれども、その癖しきやつぱり、頻しきりに臭う。

湿しつぽい、蒼あおくさい、汗蒸いれたのが跳廻はねまわる。

「ソレまた……」

気にすると、直ぐに、得ならず、時めく、黒髪かおりの薫さつが颯さつと来た。

「また夢か。」

いつまで続く、ともうげんなりして、思慮かんがえが、ドドドと地の底へ滅入めいり込む、と今度は、戸棚の蔽おおいが纏まとつて、白い顔にはならない替りに、窓の外か、それとも内か、扉ひらきの方角ではなしに、何だか一つ、変な物音……沈んだ登あしおと音。

六

その音は——今しがた聞え出した、何かを漏れて、雫しずくの落ちる不快ひびきな響が、次第に量を増して、その大きくなったものようでもあるし、新たに横合から加わったものようでもある。

何しろ、同一方角おなじに違いない。……開けて寝た窓から掛けて、

ランプ
洋燈がそこで消えた卓子テエブルの脚をつたわ伝つて床に浸出す見当で、段々
はつきり
判然して、ほたりと、耳許みももとで響くかとするかすかとまた幽になる。
幽おもてになつて外の木の葉を、夜露が伝うように遠ざかる。——が、
絶えたり続いたりいと云うよりは、出つ入りつ、見えつ隠れつする
かに聞えて、浸出にしみだすか、零こぼれるか、水か、油か、濡れたものが
身繕いみつくろをするらしい。

しばらく経たつと、重さに半ば枕まくらに埋うずんで、がつくりとした我が
頭髪かみのけが、その※しぶき……ともつかぬ水分しづきを受けるにや、じとりと濡
れて、粘ねんばり々とするように思われた。もう、手で払う元気が無い
ので、ぶるぶると振ると、これは！ 男あたの天窓あたまにあるべくもない
が、カランと、櫛くしの落ちた音……

例のほたほた零れる水と、やがてまた縁が離れて、直ぐに新しい音がはじまり、寝台の脚から搔卷の裾へかけて、こう、一つ持上げては、踏落す……それも、爪先で擦るでなしに、宙を伝う裾から出て、踵が摺れ摺れに床へ触るらしく、小股に歩行くほどの間を措いて、しと、しと、しと。

まさかこれぎりに殺されもしまい、と小松原は投に出て、身動きもしないでいれば、次第に寝台の周囲を廻つて、ぐるりと一周りして枕許を通る、と思うと、ぐらぐらと頭を取つて仰向けに引落される——はつとすると、もう横手へ退く。

その内に、窓下の点滴が、ますます床へ浸出すそうので、初手は、件の登音とは、彼これ間を隔てたのが、いつの間にか、一

所になつて、ひとすじ一条濡れた路が繋つながたらしくなると、歩ある行く方が、
びしよびしよ陰気に、湿つぽくなつて来た。

これでは目が覚めて見ると、血の足跡が、飛とび々とびに残つていよ
うも知れぬ。

飛々どころか、何として、一面の血か、水であろう、と思われ
たのは、間も無くであつた。

しとしという尋常らしい登あし音おとが、今はびちやびちやと聞えて
来た。水なら踵かかとまで浴かかろう深さ、そうして小刻こきざみに疾はやくなつたが、
水田みづたへ踏ふみ込んで渡るのを畔あぜから聞く位の響ひびき。

と卓テ子エの上で、ざざつと鳴出す。窓から、どんどと流込む。

——さてもさても夥おび多ただしい水らしいが、滝いの勢きもなく、瀬いの力

があるでもない。落ちてさかまも逆捲かず、走つてもほとぼし逆らぬ。たとえば用水が畔へ開き、田が一面の湖となる、雨あまあが上りの広田圃を見ような、鮎ふなどじょうと鱒の洪水めいたが、そのじめじめとして、陰気な、湿っぽい、ぬるぬるした、不気味さは、大河おおかわの出水でみずの凄すごいに増まさる。

そんな水がどこへ出た、と言われたら、この部屋一面、と答えようと思ひながら、小松原は但し身動きも出来ないのである。

やがて短夜みじかよが……嬉しや、もう明けそうに、窓から白濁りの色さが注さして、どんよりと光つて、卓子テエブルの上へ翻たつた、と見ると、登あしおと音が、激しくなつて、ばたばたばた、とそこいらを駈かけたが、風か、水か、ぎつと鳴る時、婦おんなの悲鳴が、

「あッ」

と云う……

「奥さん。」

と匆はねお起きる、と、起きた正面に、白い姿が、髯ふつとある！

「ああ、夢か。」

と気が着いたが、まざまざ垂れたその切きれが、ふつくりした乳にも見えるし、すつとした手にも見える。その辺あたりが、と思うと、円い肩になり、なぞえに白く胸になって、くびつて腰になって、すらりと裾のようになる。

あの、雪に、糸ひとすじ一条かかも懸からぬか、と疑えば、非ず、ひたひたと身に着いた霞のような衣きぬをぞ絡まとう。

と見ると、乳ちの辺あたり、胸へ掛けて、無む慚ざんや、颯さつと赤くなつて、垂たらたらと血に染まつた。

七

枕に響いた点した滴たりの音も、今さらこの胸からか、と悚ぞつ然とするまで、その血が、ほたほたと落ちて、汐しおが引くばかりに、見る間に、びしゃびしゃと肉が萎しぼむ、と手と足に蒼あお味みが注さして、腰、肩、胸の隅くま々まに、まだその白はいだ膚きが消きえぎええに、薄うらつす、薄らと雪を被かいで残りながら、細々と枝を組んで、肋あばら骨ぼねが透あいて見えた。

「ああ、これだな。」

と合点が行く。

途端に、がたがたと戸棚が鳴った。

自分で正気づいたと、心が確たしかになった時だけ、現うつつおんなの婦あしおとの登あしおと音あしおとより、このがたがたにもう堪たまらず、やにわに寝台ねだいからずるずると落ちた。

小松原は暗くらがりを手探りながら、鋭とどろくなつた神経に、先刻さつきから電燈でんきで照らしたほど、室内の見当はよく着けていたので、猶ためら予あいもせず、ズシンと身体からだごと扉ひらきの引手に持つて行くと、もとより錠いを下ろしたのではない。

ドンと開あく。

扉からだに身体からだが附く着くいて、発奮はげんで出たが、跨またいだ足が、そう苦くるな

しには大穴から離りようとはせぬので、地獄から娑婆へ踏掛けた
 体で、独で跪ひとりもがいて、どたんばたん、扉の面と、や、組んだりける。
 この物音に、驚破すわやと奥で起直つて、早や身構みがまえをしたと見える
 — 慌あわただしい耳にも、なおがったりと戸棚の前の怪しげな響ひびきがまた
 聞えたのに、堪たまりかねて主人あるじを呼ぶと——向うへ、突当りの縁が
 折曲つた処に、ぼうと射さしていた灯あかりが動いて、直ぐに台附の洋燈ランプ
 を手にした、浴衣の胸のはだかった、扱帯しんぎのずるずるとある医せんせ
 師いが、右を曲つて、正面へ。

開放した障子を洩もれて、だらりと裾すそを引いた萌黄もえぎの蚊帳を横に
 して、廊下の八分目ぐらいな処で、

「便所か。」

と云う、髯ひげ、口許くちもとが明々あかあかとして、洋燈ランプを翳かぎす。

この明あかりで、小松原は水浸しよぼたしになったほど、汗びつしよりの、我ながら萎しよぼた垂たれた、腰すわの据すわらぬ、へとへとになった形を認めしたが、医学士はかつて一年志願兵でもあつたから、武備も且つある、こんな時の頼母たのもしき。顔を見ると、蘇よみがえ生かえつた心地で、

「やあ。」と掛けた声こゑが勢いきおいなく中途かすで掠かすれて、

「夜更けに恐縮、」

とやつと根へやこそぎに室むろを離はなれた。……扉ひらきうしろを後ござまに突放つせば、ここが当館やかたの関門かんもん、来診者の出入口で、建附けんぞくに氣きを注つけてあるそ
うで、匆はねかえ返かえつて、ズーンと閉しまる。

と突出ていされた体ていにしよんぼり立つて、

「どうも、何だ、夜夜中、」

医師せんせいは亭主関白といった足取、深更に及んでも、夜中でも、

その段は一切頓とんじやく着なく、どしどしと廊下を踏んで、やがて対

しむかい

向むかひになる時、傍かたわらの玄関の壁越すさまに凄じいびきいきを聞いて、

「さかん 壮だ、壮だ。」

と莞爾にっこりする。

顔かおつき色が、ぐつすり寝込んだ処を、今ので呼覚よびさまされて、眠い

に迷惑らしい様子もないので、

「どうも気の毒です。酷ひどい目に逢つてね。」

といささか落着く。

医師せんせいは立たちはだかりつつ、

「どうした、蚊軍ぶんぐんの襲来かい。」

なかなか、こんな事を解釈する余裕はなくって、

「ええ、」

といかにも気が利かない。

「蚊に城を破られたかよ。」

「そこどころか。」

対手あいての余り暢気のんきなのが、この際うら怨めしく思われた。

「この中は大変だ。」

「大変だ？」

「何か来たんだ。」

「何、入って来たか、」

と洋燈ランプを上げて、扉ひらきの上を、ぐいと仰ぐ。

「がたがた遣やつてる。」

小松原は、ずうつと医師せんせいに身を寄せる、と目を返して、今度はその体ていをじろじろ視ながめて、

「震えてるね、君は。」

八

「どうだい、心持は。もう爽快さつぱりしたろう。」

主人あるじの医師せんせいは、奥座敷の蚊帳の中に、胡坐あぐらして、枕まくら許もとの煙草盆たばこを引寄せた。

「こういう時は、医師いしやの友達たのもは頼母たのもしかろう。ちと処方外の療治ありがだがね、同じ葡萄酒ぶどうしゆでも薬局で喇叭らっぱを極きめると、何となく難ありが有味たみが違って、自ら精神おのずかが爽快そうかいになります。しかし怯おびえたつけ、ははは。」

と髯ひげを捻ひねつて、冴さえ々ざえしい。

蚊がぶうんと唸うなつて、齒はぎ切もどこかです。灯あかりの暗い、鬱うつと

陶うしかるべき蚊帳の内も、主人あるじがこれであるから、あえて蒸暑うくもないのであった。

小松原は、裾すそを細う、横に手枕で気を休めていた。

「怯おそえたどころか、一時はそのままになるかと思つた。起きるには起きられず、遁にげるには遁にげられず、寝返りさえ容易じゃない、

實際息が留まりそうだったものね。」

のどななめ
咽喉を斜に手を入れて、痩せた胸をおさえながら、

「見たまえ、いまだにこの動悸を、」

「色は白くつても、野郎の癩をしやくおさをおさえたとつてはじまらない。は、は、は、いや、しかし弱い男だ。」

「ふ、ふ、」

と力抜けた声で笑つて、

「奥さんは？」と俯うつむ向けに額を圧える。

「御心配に及びません。君が侵入に及んだために他室へ遠慮した
というんじゃない。小児こどもの奴がまた生意気に、私わたしがちと飲過すと、
酒臭い、と云つて一つ蚊帳を嫌います。いや、大おおきに台所だいしよの内諭ないゆな

きにしもあらずだろうが。

そこで、先刻さつき、君と飲倒れたまま遠島申附かつた訳だ。——空からでつぼうきつかけ鉄砲の機会もなしに、五斗兵衛むつくと起きて、思入おもいいれがあつたがね。それつきり目が冴えて寝られないで、いささか蚊帳の広さかなの感あつた処です。

君もちよつとは寝られまい、朝までここで話したまえ。」
折から陽気にといい積りか、医師せんせいの言は、大に諧おおい諧かいぎやくの調を帯びたが、小松原はただ生真面目きまじめで、

「どうかそうしてくれたまえ。ここを追出されたればといつて、二度とあすこへ行つて寝る気はしない。どうも驚いた。」

「はじめから奇を好むからです。あすこへ行つて寝るなんざ、ど

の道好よくない。いずれ病人でなくつては乗つからない寝台ねだいだもの。もつとも、私にや大切な商売道具だがね。

しかしそれにしてもあんまりな怯おびえ方だ。夢を見て遁出にげだすんざ、いやしくも男子たるべきものが……と云つて罵倒ばとうするわけじやないが、ちとしつかりしないかい。串じょうだん戯だんじやない、病氣になる。

そんなのが嵩こうじると、何も餅屋もちがつて、ここで病名は申さんがね、起きている真昼間まっぴるまでも目に見えるようになる。それ、現在目に見えて、そこに居るから、口も利くだろう、声も懸けようではないか。傍はたから見ると、直ぐにもうキの字だぜ、恐るべし、恐るべし。

何も、朦朧もうろうと露あらかわれたつて、歴々ありありと映つたつて、高おんなが婦おんなじゃないか。婦の姿が見えたんだつて言うじやないか。何が、そんなに恐おそいものか。」

「別に見えたつて訳じやない。何だか寝台の周まわりを歩あるいたんだが、そう、どつちにしても婦おんならしく思われた——それがすぐに、息の詰いるほど厭いやな心こころ地もちだつたんではないけれども、こう、じとじとして、湿いつぽくつて、陰いん気で、そこらに鯰なますでも湧わ出しだそうな、泥水の中へ引摺ひきずり込まれこるまれれそうな気がしたんで、骨ほねまで浸透しみとおるほど慄然ぞくぞく々々するんだ。」

と肩を細こうして、背せで呼い吸きをする。

「男らしくもない、そんな事を言つて梅雨つゆどき期はどうします、まさ

か蓑笠みのかさを着て坐つてやしまい。」

「うむ、何、それがただのじとじとなら可いいけれど、今云う泥水の一件だ、轟ごうと来た洪水か何かで、一ひと思おもに流されるならまだしもです——灯あかりの消えた、あの診察処じよのような真暗まっくらな夜、降るともつかず、降らないでもない、糠雨ぬかあめの中に、ぐしやりと水のついた畔道あぜみちに打坐ぶつすわつて、足の裏を水田みずたのじよろじよろ流ながれに擦すぐられて、裙すそからじめじめ濡通つて、それで動くことも出来ないような思おもいを一度して見たまえ。」

と力強く云つて、また小松原は溜息ためいきで居る。

九

せんせいおもむろ
 医師は徐に、煙草盆を引寄せて、

「それ、そこが苦労性だと言うのです。窓を開けたまままで寝たから、夜風が入って湿っぽかったらただ湿っぽかったで可よかろう。何も真ま暗くらな夜、田圃たんぼの中に、ぐしやりと坐まつて、足の裏くすぶを擦こられて、腰こしから冷ひえ通とおるとまで、こじつけずとももの事ことだ。その氣きでお膳ぜんに向むつた日ひにや、お汁つゆの湯ゆ氣きが濛もう々もうと立たち騰のぼると、これが毒どくのある霧きりになる、そこで咽むせ死じにかねませんな。」

「そう一概くわいに言いつてくれる事ことはない。どうせ現げん在ざいお目めに懸かけた臆おそ病びょうです。それを弁解べんげするんじやないが、田圃たんぼだの、水浸みしだの、と誇大かうだいに妄もう想ぞうした訳わけではありませぬ。」

實際、そんな目に逢つて、一生忘れられん思おもひをした事があるからだよ。いや、考えても身の毛が弥よ立つ。」

フイと起返つて、蚊帳の中をみまわしたが、妙に、この男にばかり麻目あおが蒼あせい。

醫師せんせいは落着いて、煙を吹かして、

「どこで野宿をした時だ、今度の旅でか。」

「ううむ。」

と深く頭かぶりを振つて、

「いつかの時さ、あの一件の……」

と言懸けて、頬のこけた横顔になつて打背うちそむいた。——小松原の肩のあたりから片かた面おもの耳み朶みたぶかけて、天井の暗さが倒さかさまに襲襲つ

たのを、熟じつと見ながら、これがある婦人と心中しようとした男うなずだと頷うなずいた。

当時その風説は、友達の間にも誰も知らぬものはなかったが、医学士は、折から処を隔へていたので、その場合何事にも携たづなわらならんだ。もう三年か四年かと、指を折るほど前まへに、七十五日も通越とつしたから、更あらためて思出すほどでもなし、おいそれと言ことばに従したがって、極きまりの悪い思おもいをさせるでもなかろう。で、一向無頓着むとんじやくに、

「何だい、いつかの一件とは？」

「面目次第こつとも無い件ことさ。三年前ぜんだ、やっぱりこの土地で、鉄道往生そくをし損そくなつた、その時なんです。」

「ああ、そんな事があつたつてな、危あやいじゃないか。」

と云う内に自おのずから真心が籠こもつて、

「一思いに好男子、粉にする処だっけ。勿論、私がこうして御近所に陣取つていれば、胴どうぎり切きりにされたつて承うけあい合助あいつかる。洒落しやれにちよいと轢ひかれてみるなんぞも異おつだがね、一人の時は危険だよ。」
わざと話に、一人なる語ことばを交えて、小松原が慚ざん愧きの念を打消おとそうとするつもりだった。

ところが案外なやけ！ この情なさけに、太いたく動うごかされた色が見えたが、面おもてを正しゆう向直むかひつた。

「何とも——感謝する。古ふる疵きずの悩なやみを覚おぼえさせまい、とそうやつて知らん顔うらみをしてくれるのは真まに嬉こしい、難ありがた有あいが……それで
は怨うらみだ。

ねえ。

あれほどの騒ぎだもの。ことに自惚うぬぼれらしいが、私の事を忘れないでいてくれる君が、しかもこの土地へ来ていて、知らないという法はない。承知の上で、何にも知らん振ふりをしてくれるのは、やっぱりあの時の事を、世間並に、私が余処よその夫人を誘って、心中しそくを損なった、とそう思っているからです。

勝手な事を言うものには、言わしておいて構わんけれども、君のような人に対しては、何とももって恥入るんだ。」

と俯うつむ向むいて腕こまぬを拱まぎ、

「その君の情なさけある心で、どうか訳を聞いて欲しい。くだい事は言わん。何しろ、少なくとも君だけには言訳をする責任があると思

う。」

醫師せんせいは潔く、

「承わろう。今更その条道すじみちを話して聞かせる……惚気のろけなら受賃を出してからにしてもらおうし、愚痴ぐちなら男らしくもない、止よしたまえ——だが、私たちが誤解をしているんなら、大おおに弁おじて聞かせてくれ、今まで疑っていたから私にも責任がある。」

「そう、きつぱりとなられては、どうもまた言出しにくい。」

「可いいじゃないか、その容体を聞かせたまえ、醫師いしやには秘密を打う開ちあけて可いもんだ。」

「……………」

言い淀よどんで見えたので、ここへ来い、と構かまえを崩くして、透すきを見せ

た頬杖ほおづえし、ごろりと横になつて、小松原の顔を覗のぞ込みつ、
「で、何か、その晩、田圃たんぼに坐つたのか。」
と軽く扱あしらつて誘さそいを入れた。

十

「まあ、坐つたんだ。」

小松原は苦笑して頬なを撫でたが、寂しそうに打傾き、

「土下坐どげざをしたというわけでもないが、やっぱり坐つていたんだ
よ。」

「またどうしてだい。」

と醫師せんせいは寛くつろいだ身の動作ごなしで、搔卷かいまきの上へ足を投げて、綴つづり糸いとを手で引張ひっぱる。

「それがね、」

と熟じつと灰吹を見詰めてから、静かに卷まきた蓆たばこを突つ込こみながら、
 「はじめは何でもない事だった。——何の気なしに、あの人を、
 そこいらへ散歩に誘つたんです。」

「あの人ツて？」

「……………」

「ははあ、対あいて手の貴婦人だね。」

「そんな事を言わないで、」

と吸口をもつと突つ込こむ。

「可いじゃないか、何も貴婦人と云つたつて、直ぐに浮気だ、という意味ではないから。」

「何、貴婦人に違ひはないが、その対手が悪い。あいて」

「可よし、可よし、黙つて聞こう。そうまた一々気にしないでお話しなさい。そこで。」

「御存じの通り、あの前の年から、私は体が悪くつて二年越この田舎へ来ていたんだ。あの人は、私が世話になつてゐる叔父が媒酌なこ人で結婚をしたんだらう。大して懇意ではないが、見知越みしりごしでいたのだつた。」

ちやうど戦争のあつた年でね。

主人は戦地へ行って留守中。その時分、三才みつだつた健坊と云う

のが、梅雨あけ頃から咳せきが出て、塩梅あんばいが悪いので、大した容体でもないが、海岸へ転地が可いい、場所は、と云つて此地ここを、その主治医が指定したというもんです。

小児こどもの病気とはいいいながら、旅館と来ると湯治とうじらしく、時節柄人目に立つ。新あらたに別荘を一軒借りるのも億劫おつくうだし、部屋借がりが出ず入らず、しかるべき空座敷あきざしきがあるまいか、と私が此地こつちに居た処から、叔父へ相談があつたというので、世話をするように言つて来た。

そちこち聞合せると、私が借りていた家から、田圃たんぼの方へ一町ばかり行つた処に、村じや古店で商あきないも大きく遣やつてゐる、家主の人柄よも可いし、入口が別に附いて、ちよつと式台もあつて、座敷が

二間、この頃に普請をしたという湯殿も新しいし、畳も入替えたのがある。

直ぐに極めて、そこへ世話をして、東京から来る時も、私が停ス車場へ迎いに行つて、案内をしたんだっけが、七月盆過ぎから来ている、九月の末の事だったよ。

五日ばかり降続いて、めつきり寂しくなる。朝晩は、単衣ひとえに羽織を被きて、ちとまだぞくぞくして、悪い陽気だとばかり、言合つて閉籠とじこもっていた処……その日は朝から雨が上あがつて、昼頃には雲くももぎれ切がして、どうやら晴れそうな空模様。でもまだ、蒼空あおぞらは見えなかつたが、多日しばらくぶりで、出歩で行くあるに傘は要らない。

小児こどもを歩行かせるには路みちが悪いから、見得張らない人だ、また

おんぶをして、宿の植込の中から、斜はすつかいに私の前二階を覗のぞいて、背中の小児に言わせるように、前髪を横向けにして、

(お出掛けなさいませんか。)

と涙を誘いに見えるだろう。

(小松……君。)

と原抜きにして、高慢に仇あどけ気なく高声で呼ぶ、小児の声が、もうその辺から聞えそうだと、思ったが、出て来ない。

その内、湯に入ると、薄うつつりと湯槽ゆぶねの縁へ西日がさす。覗のぞくと、空の真ま白しろな底に、高くから蒼空が団扇うちわをどけたような顔を見せて、からりと晴れそうに思うと、罎かこいの外を、

(水が出たぞ。)

(田圃一面。)

と饒舌しやべつて通つた。

これを聞くと、何か面白い興行でもはじまつたような気がして、勇んで、そわそわして、早く行つて見たくつて、碌ろくに手拭てぬぐいも絞らないで、ふらんねるを引ひかけたなり、帽子も被かぶらずに、下駄つっかを突掛けて出たんだがね。」――

十一

「でみず汎水だ、と云つたつて、この通り、川らしい川のない処だから、かけだ駈出して見物に行くほどの事もなさそうなもんだけれど、私は何

だ。……

すみれ つばな
董、茅花の時分から、苗代、青田、豆の花、蜻蛉、蛭、何でも

すき
田圃が好で、殊に二百十日前後は、稲穂の波に、案山子の船頭。

ずいき なび
芋※の靡く様子から、枝豆の実る処、ちと稗 蒔染みた考えで、

しんざん だいたく
深山大沢でない処は卑怯だけれど、鯨より小鮒です、白

ぎ うずら ばん
鷺、鶉、鶺鴒、皆な我々と知己のようで、閑古鳥より

なつかし
は可懐い。

山、海、湖などがもし天然の庭だったら、田圃はその小座敷だ
ろう。が、何しろ好きでね、……そのせい、私には妙な事があ
る。

いつ頃からかはよく分らんが、床に入って、可心持に、すつと

足を伸すのば、背が浮いてせなか、他愛なくたわいこう、その華胥の国とか云う、

そこへだ——引入れられそうになると、何の樹か知らないが、萌も

えぎいろ

黄色の葉の茂ったのが、上へかかつて、その樺色かばいろの根を静しずかに

洗う。藍あゐがかつた水の流ながれが、緩く畝うねつて、前後あとさきの霞あんだ処ところが、

枕まくらからかけて、睫まつげの上へ、自分と何かの境さかいめ目めへ露あらわれる。……

トその樹の下に、筧ざるか何か手に持つて、まあ、膝ぐらいな処ところま

で、その水へ入つて、そつと、目高か鮒すくか、掬くつてる小児こどもがある。

其奴そいつが自分で。——ああ、面白おもしろそうだと思つと、我ながら、引き

入れられて、身節みふしがなえて、嬉うれしくなる。その内に波立ちもしな

いで、水の色が濃こくなつて、小濁せきにごりに濁にごると思つと、ずつと深

さが増して、ふうわり草の生えた土手あふれへ溢あふるんだがね、その土手

が、城趾しろあとの濠ほりの石垣らしくも見えれば、田の畔あぜのようでもあるし、沼か、池の一角のようでもある。その辺は判然しないが、何でも、すつと陽炎かげろうが絡まつわる形に、その水の増す内が、何とも言えない可いい心地で、自分の背中か、その小児の脚か、それに連れて雲を踏むらしく糶せりあが上ると、土手の上で、——ここが可訝おかしい——足の白い、綺麗きれいな褌つまをしつとりと、水とすれすれに内端うちわに搔か込んで、一人美人たたずがイむ、とそれと自分が並ぶんで……ここまで来るともう恍惚うっとり……

すやすや寝ます。

枕に就いて、この見える時は、実際子守唄すで賺かされるように寝られる。またまったく心持の可いい時でないと見えんから、見え

ない時でも見るように、見るようにと心掛ける——それでも、散らかつて、絡まとまらないで、更に目に宿らん事が多い。そういう時は、きつと寝そびれて悩むんだ。

そこで、大好きな田圃の中でも、選えりわ分けて、あの、ちよろちよろ川が嬉しい。雨あまあが上りにちつと水が殖ふえて、畔へかかった処が無類で。

取留めのない事だが、我慢して聞きたまえ。——本人にも一向つかま掴え処はない。いつも見る景色だけでも、朝だか、晩方だか、薄曇ひなかった日中だか、それさえ曖あいまい昧で、ただ見える。

さあ、模様が詔あつらえむ向むきとなつたらう——ところで、一番近い田圃へ出るには、是非、あの人が借りていた、その商あきんどや家の前

を通るんだったよ。

店をはずれて、ひよろひよるとした柳で仕切った、その門を見
ると、小児が遊んでいたらしく、めんこが四五枚、散に靴脱ぎの
たたきの上へ散つて、喇叭が一ツ、式台に横飛び。……で、投出
して駈出したか、格子戸が開放し、框の障子も半分開いて、
奥の長火鉢の端が見えた。

その格子戸の潜の上へ手を掛けて、

(健ちゃん、)

と呼んでみたが、黙っていた。

(居ないの。お留守、)

と遣ると、……そこもやつぱり開いたままの、障子の陰の、湯

殿へ通う向うの廊下へ、しとしとと跫音あしおとがして、でも、黙然だんまりで、ちよいと顔だけ見せて覗のぞいたが、直ぐに莞爾にっこりして、縁側を奥座敷へ上あがった姿は……

帯なし、搔取りかいど気味に褌つまを合せて、胸で引抱えた手に、濡手ぬれてぬ拭ぬいを提ひげていた。二間を仕切った敷居際に来て、また莞爾にっこりすると、……」

「謹聴、」

と医学士せんせいが唐突だしぬけに云った。

「真面目だよ、真面目だよ。」

「湯上りの、ぱつと白い、派手な、品の可い顔を、ほんのり薄うすべ紅にの注さした美しい耳許みもとの見えるまで、人可ひと懐なつく斜つこめにして、

(失礼、今ね、お返事の出来ない処だったの……裸体美人、)

と云つて花やかな笑顔になる。いかにも伸のび々のびと寛ゆつたり容りして、

串じょうだん 戲ごの一つも言えそうな、何の隔へだてもない様子だったが、私

は何だか、悪い処へ来合せでもしたように、急せき込こんで、

(田圃へ行つて見ませんか、)

と何のあしらいもなく装もり附つけた。

(は、参りましょう、)

と頷うなずいて、台所の方を振返りながら、

(ちよいと、御免なさいよ。)

支度を、と断るまでもなく、平常着ふだんぎのままでは出たが、――

その時、横向きになつて、壁に向うと、手を離した。裙すそが落ちて、
 畳さつに颯さばと捌けると、薄色の壁に美しく濡ぬれ蔦づたが搦からんで絵模様、水
 の垂りぬれげのような濡毛ぬれげを、くつきりと肱ひじで劃くぎつて、透通すとおるように櫛くしを
 入れる。ちようどその柱に懸けて、いかな姿見が一面あつた
 —— 勿論、東京から御持参の品じゃない。これと、床の間の怪し
 い山水は、家主のお愛想なんです——あの人ひとがまた旅へ姿見つくりを持
 つて出るような心掛けなら、なに、こんな処で、平氣でお化粧つくりを
 する事もなからう。

熟じつと見てもいられますまい。この際、どこへ持つて行こうか、

と背ける目を掠めて、月の中を雪が散った……姿見に映った胸で、
……^{はだ}膚の白い人だっけ。

直ぐにそれは消えたけれど、今のその棲はずれの色合は、どう
やら水際に足を白く、すらりと立った姿に見えたが……

ああ、その晩方、幻のような形で、二人して、水の上に立つよ
うになったんだ。

何に誘われて出たんだか、——とうとうあんな酷い目に逢う原
因だったがね。別に怪しいものじゃない、自分が時々見る美しい、
嬉しい夢、——いや、夢じゃない、我が心に、誘出されたもの
かと思う。」

小松原は、^{うつつ}現のように目を睜って、今向直って気を入れた、^せ医

師んせいの顔を瞻みまもりながら、

「また愚痴だ、と言うだろうが、後で考えれば、私は今までの経験に因ると、いつでも、湯の中でフイと気が立って、何だか頻しきりにそわついて、よくも洗わないで飛出した時に限って、余りめでない事がない。一度も小児こどもの時だった、やっぱりそういう折に大怪我をしたのを覚えている。

それにね、そんな風で停車場ステーションへ迎いに行つて、連れて来て、家うちも案内する、近所で間に合せの買物まで、一所あるに歩行いて、台所まないたの俎あたり、拵ばち鉢かつこうの恰好まで心得てるような関係になつていたから、夏うちの中も随分毎日のように連立つて海岸へ行つたんで――
また小児のために、それが何よりの目的なんでね。

来たてには、手荷物の始末、掃除の手伝いかたがた、馬丁と、小間使と女中と、三人が附いて来たが、煮炊が間に合うようになると、一度、新世帯のお手料理を御馳走になった切り、その二人は帰った、年上の女中だけ残って。それも戦時の遠慮からです。

一人になったが、女中には大した用があるんじゃない。どうせ旅の事で、何を極きまって、きちようめにしなければならんというでもなし、一向気取らない女主人で、夜も坊ちゃんを真まんなか中へ、一ツ蚊帳に寝るほどだから、お茶漬をさらさらで、じやかじやかと洗ってしまえば埒うちは明く。女中も物珍らしく遊びたいから、手廻しよく、留守は板戸の開閉一つで往来の出来る、家主の店へ頼んで、一足後おくれ馳ばせにでも、

(坊ちゃん) ……か何かで、直ぐに追着く。

だから、いつでも女中が一所で、その健坊と四人連れ立たないのは珍らしい、まあ、ほとんど無かつたろう。

浜に人影がなくなつて、海松ばかり打上げられる、寂しい秋の

晩方なんざ、誰の発議だったか、小児が、あの手遊おもちゃのバケツを

振提ぶらさげると、近所の八百屋へ交渉して、豌豆えんどうまめを二三合……お

三どんが風呂敷で提いそげたもんです。磯へ出ると、砂を穿ほつて小さ

く囲つて、そこいらの燃料もえくさで焚たき附ける。バケツへ汐しおくみ汲みという

振事あつてがあつて、一件ものをうでるんだが、波の上へ薄うつつりと煙なびが靡

くと、富士を真正まっしょうめん面に、奥方もちつと参る。が、落日に対し

て真まことに気高い、蓬菜ほうらいの島にでも居るような心持のする時も、い

つも女中が随ついていたのに。」

十三

「それが、その時に限つって二人きりだった。もつともね、

(健ちゃんは?) ツて聞いたんだ。

(そこいらに居ましよう。)

と藤色の緒おもてつきの表おもてつき附こまげたの駒下駄こまげたを、紅べにの潮さした爪つまさき先に引掛ひっかけながら、私が退のいた後へ手を掛かけて、格子のぞから外そとを覗のぞいた、門かどを出でてからで可よさそうなものを、やつぱり雨あめに閉籠とじこもった処ところを、四よ五日振よりの湯上ゆかりで晴せいせい々せいせいして、戸外おもてへ出でるのが嬉うれしくつて、気き

が急せいたものらしかった。

帯もぎつとした引掛結ひっかけびで、

(おや、居すませんか?)

ツはすはて蓮葉はすはに出て、直ぐ垣隣りの百姓屋の背戸を覗のぞ込んで、

(健ちゃん、健ちゃんや。)

と呼ぶと、急に、わやわやと四五人小児こどもの声がして、向うの梅

の樹の蔭で、片手に棒千切ぼうちぎれを持って健坊が顔を出した。田圃たんぼへ

お出いで、と云うと、

(厭いやだべい。)

で突掛つっかるように匆附はねつける、同じ腕白なかも夥間まに大勢なしみ馴染なしみが出来たか

ら、新仕込のだんべいか何かで、色も真黒まっくろになった。母かあさん様が

またこれを大層喜んでいたもんです。

(じや遊んでるかい。母様は運動に行つて来るよ。)

(うん、)

と云うと、わつと呐喊とぎを上げて、垣根の陰へ隠れたが、直ぐにむらむらと出て、鶏小屋とりごやの前で、健ちゃんすつとは素飛ぶ。

(お庇かげ様さまで、この頃の悪い陽気にも障らなくなりましたよ。)
と嬉しそうに見えて、

(どちらへ?)と聞く。

(踏切の方へ行つて見ましよう。水が出たそうですから。)

百姓家二三軒でもうなわて暇なだが、あすこは一方畑だから、じとじと濡れてるばかり。片かた方つぽに田はあつても線路へ掛けて路みちが高い。

ために別に水らしい様子も見えん。踏切を越して土手を畦あぜづた伝いに海岸の方へ下りると、なぞえに低くなるから、そこへ行けばちよろちよろ見えよう——もつとも汎水でみずと云うほどの事はどの道ないのだから、驟を帰る百姓も、私たちのぶらぶら歩行あるきを超越す大八車の連中も、水とも、川とも言うものはなく、がったり通る。路は悪かった。所々の水溜みずたまりでは、夫人おくさんの足がちらちら映る。真中まんなかは泥濘ぬかるみが甚ひどいので、裙すその濡れるのは我慢しても、路みちちばた傍ちばたの草を行かねばならない。

ステーション
停車場は、それあすこだからね。柵の中に積んだ石炭が見える、妙しろびかりに白光しろびかりに光って、夜になると蒼あおく燃えそう。またあの町の空を、山へ一面に真黒な、その雲の端が、白く流れ出して、

踏切の上を水田みづたの方へ、むらむらと斑まだらに飛ぶ。が海を抱いだいた出崎の隅だけ朗かな青空……でも、何だか、もう一拭ぬぐい拭ぬぐを掛かけたいように底が澄まず、ちようど海の果はてと思う処ところに、あるかなし墨を引いた曇くもりが亘わたつて、驚破すわと云うとずんずん押出して、山の雲と一絡まとめにまた空を暗闇くらやみにしそうに見える。もつともそれなり夜になろうが、それだけに、なお陰気で、星は出そうにもなし、雨になると戸を閉めるから、遠い灯ともしびの影も見られなそうな夕暮だった。

(もう、お天気になりましたよね。)

(さあ、)

とは云つたがどうも請合いかねる。……明あから白さまに云うと、この上降続あいちゃ、秋風は立たつて来たし、さぞ厭あき厭あきして、もう

引上げやしまいか、と何だかそれが寂しかったよ。

風はなかった。稲葉がそよりともせぬ。けれども何となく、ざわついて海の波が響くようなは、あふ溢れた水が田へ被るかぶそれらしかった。

踏切を渡ると、からす鴉が一羽……その飛んだ事したら——びっくり吃驚したほど、頭の上を矢を射るように、目を遮つて、低い雲か、山の端か、は暗い処へ消えたつけ……早や秋だったねえ。あまけ雨気が深く包みはしたが、どの峰も姿が薄い。

もう少しトンネル隧道の方へ行くと、ゆあすこに、路の真中まんなかに、縦に掛けたちよつとした橋がある。ぼうぐい棒杭のように欄干がついて、——あれを横切つて、山の方から浜田へ流れて出る小川を見ると、

これはまた案外で、瓦かわら色いろに濁ったのが、どうどうとただ一ひとは幅ばだけれども畝うねりを立てて、橋の底へすれすれに凄すさまじいほど流れている。いつもは俯うつむ向いて、底を見るのが、立って、伸上つて見送るほど、嵩かさ増して、薄すすきの葉が瀬を造つて、もうこれで充いっぱい満と云うように、川柳が枝を上げて、あぶあぶ遣やつてた。」

十四

「この水が、路みち端ばたの芋大根の畑を隔てた、線路の下を抜ける処は、物もの凄すごい渦を巻いて、下田圃へ落ちかかる……線路の上には、ばらばらと人ひと立たちがして、明あかるい雲の下に、海の方へ後うしろ向むきに、

ひとふでがき
 一筆画の墨絵で突立つ。蓑を脱いで手に提げて鍬を支いた百姓
 だの、小児を負った古女房だの、いかにも水見物をしているらし
 い。

見ると、堪らなく嬉しくなった。

(さあ、こうしておいでなさい。)

と畦を踏分けて跡をつけては、先へ立って、畠を切れて、夜は
 虫が鳴く土手を上ったが、ここらはまだ棲を取るほどの雫じやな
 かった。

線路へ出て、ずっと見ると、一面の浜田がどことなく、ゆさゆ
 さ動いて、稲穂の分れ伏した処は幾ヶ所ともなしに細流が蜘蛛
 手に走る。二三枚空が映って、田の白いのは被ったらしい。松が

あつて雑樹がひとむら一叢、一里塚の跡かとも思われるのは、妙に低くなつて、沈んで島のように見えた、そこいらも水が溢あふれていよう。
 (もうこれだけかね、)

甚だ怪けしからん次第だつたけれども、稲の上を箒いかだでも漕こいでくれたら、と思つて、傍そばに居た親仁おやしに聞くと、

(汐しおが上あがつたら、まつと溢かかるべい。)

と、腕組をして熟じつと視ながめる。

成程、漁師町を繞めぐつたり、別荘の松原を廻めぐつたり、七八筋ななやに分れて、また一ツになつて海へ灌そそぐが、そこ行ゆくとこれでも幅が二十間ぐらい、山も賦ふになれば、船も歌える、この様子では汐しおが注さそう。

と二人で見ているうち、夕日のなごりが、出崎の端から※と雲を射たが、親仁の額も赫かつとなれば、線路も颯さつと赤く染まる。稲を潜くぐつて隠れた水も、一面に倂おもかげだ立たつて紫雲英げんげが咲満ちたように明るむ、と心持、天の端を、ちらちら白帆しらほも行きゆきそうだった。

またこれに浮かれ立たつて、線路を田圃とんぼへ下りたんだが、やがて、稲の葉が黒くなつて、田が溝染どくぞめに暮れかかると、次第に褪あせて行くゆ歯あかねいろ色いろを、さながら剥はぎたての牛の皮を拵つまだげた上を、爪立つまだつて歩ある行くゆような厭いやな心持こころもちがするようになった。

ちようど、田圃道を、八分目ほどで、一本橋がある。それを危あぶなつかしく、一度渡つて、二度目にまた引返してからだつた……もう一ひとまた跨またぎで、漁師町の裏あがへ上ろうとする処で、思いがけなく行ゆ

きついたらうではないか。」

「ふん、どうしてだい。」

と醫師せんせいは枕を抱く。

小松原は一息ついて、

「どうして？ツて、見たまえ、いつもは、手拭てぬぐいを当てても堰留せきと

められそうな、田の切目きれめが、薬研形やげんなりに崩込んで、二ツ三ツぐる

ぐると濁にごりみず水の渦を巻く。ここでは稲が藻屑もくずになって、どうど

う流れる。もつとも線路から段々さが下りに低いからね。山の裾すそで取

囲んだ浜田ありたけの溢れ水あふは、瀬になって落ちて来るんだ。但

し大した幅じゃない、一間には足りないんだけれども、深さは、

と云う日になると、何とどうです、崩れ口の畦あぜの処に、漁師の子

が三人ばかり、素すっぱだか裸裸で浸ひっていたらう。

(どうだ深いか。)

と一ツ当つつかかつて見ると、己おれ達は裸で泳およがいで……聞きくだけ野暮よぼだ、と突つ懸かり気味きみに、

(深え。)

(二丈ふたたけの上あるぜ。)

と口くちを尖とんがらしりばしよりかしたも道理このほうこそ。此こ方ほうづれの体ていは、と見ると、私が尻端折しりばしよりで、下駄げだを持った。あの人もまた遣附やりつけない棲つまを取とつて、同じく駒下駄こまげだをぶら提ひげて、跣足はだしで、びしよびしよと立たつた所ところは、煤すすはき払はの台所たいしよへ、手桶ておけが打覆ぶつかえった塩梅あんばいだらう。」

この時一所いここに笑わらい出したが。

「ね、小児こどもだって、本場の苦勞くろうと人が裸で出張つてる処へ、膝までも出さないんだ、馬鹿にするないで、もつて、一本参つたもんです。

が、まだ威おどかしではないか、と思う未練があつた。——処へ、ひよっこりしばらく潜つていたのが、鼻せきの前へ、ぶつくり浮いたかっぱこそう河童小僧。

おやと思うと、ぶるぶると顔をやって、ふつとひとすじ一条あおむ仰向けに水を噴ふいた……深いです。

どうもこれにや逡巡たしろいで、二人で顔を見合せたんだ。」

十五

「そこさえ越せば、漁師町を一廻りして帰れるんで、ちようど可
いくらいな散歩のつもりだったんだが、それだもの、どうして、
渡るどころの騒ぎじゃない。

さあ、引返すとなると、線路からここまでの難儀さが思出され
る。難儀だつて程度問題、覚悟をしての草鞋掛わらしがけでもあれば格
別、何しろ湯あがりのぶらぶら歩き。

それ、今言つた通り跣足はだしです。なるだけ水の上の高い処を、と
拾つて畦あぜを伝え、雨続きで、がばがば崩れる、路を踏めば泥ぬかる
凜みすべでみすべる、乾いた処ちつともなし。……

(お危のうございますよ。)

(は、大丈夫、)

と声を掛けて、やつと辿たどつたのだつた。また厄介なのは、縦横に幾ヶ処ともなく、畦の切目があつて、ちよいと薪まきを倒したほどの足掛あしかけが架かかつて、たださえ落す時分が、今日の出水でみずで、ざあざあ瀬になり、どつと溢あふれる、根を洗つて稲の下から湧わきた立つ勢いきおい、飛べる事は飛べるから、先へ飛越えては、おもしろ半分、(お手をお取り申しましようかね。)

と一畦離れていて云うと、

(是非、どうぞ。)

なんて笑いながら、ま、どうにか通つたんだつけ。浅いと思つた水溜みずたまりへ片足踏込んで、私が前さきへ下駄を脱いだんで、あの人

も、それから跣足^{はだし}、湯上りの足は泥だらけで——ああ、気の毒だ
 と思う内に、どこかの流れで、歩行^{ある}してる内に綺麗に落ちる、そ
 の位^{みんな}皆水です。

で三町ぐらい、また引返さなけりやならないんでね、それに段
 々暗くはなる、足許^{あしもと}も悪かろう、うんざりしたが、自分は、ま
 あ、どうなり、さぞ困った顔をして、と振返る……

とこの時……

薄^{うつつ}り路^{かか}へ被^{かか}った水を踏んで、その濡^{ぬれ}色^{いろ}へ真^ま白^{っしろ}に映^{うつ}って、蹴^け
 出^だし棲^{づま}の搦^{から}んだのが、私と並んで立^たった姿——そっくりいつも見
 る、座敷の額の画^えに覚^{うつつり}えのあるような有様だった——はてな、夢
 か知らん……と恍惚^{うつつり}となった。

ざあざあ、地の底を吹き荒れる風のような水の音。

我に返つて、密と顔を見ると、なに大して困つたらしくもなかつた。

(ここは通れません。)

(引返しましょう。)

(飛んだ御案内をしてお気の毒です。)

(いいえ、おもしろうござんすよ。こんな奇い態をして。)

と美しく微笑みながら、

(いつそ袂を担ぎましょうか。)

この元気だから。どうやら水嵩も大分増して、橋の中ほどを、蝦蟇が覗くように水が越すが、兩岸の杭に結えつけてあるだけが

便りで、渡ると、ぐらぐらした、が、まあ、あの人も無事に越した。でも、私の帯へ背後うしろから片手をかけて。

それから——前を見ると、こつちが低いせいか、ぐるぐる廻りにうね畝うねつて流れる、小川の両方に生おいかぶ被かぶさつた、雑樹のぞうぞう揺れるのが、累かさなり累かさなり、所々あお煽あおつて、高い所を泥水が走りかかつて、田も畑はたも山ひといろも一色ひといろの、もう四辺あたりが朦朧もうろうとして来た、稲なんぞは、手で触るぐらいの処しか、早や見えない。

人は一人も居おらず、……今渡つた橋は、魚うおの腹のようにほのじろ灰白ほのじろく水の上へ出ているが、その先の小兒こどもなどは、いつの間にか影も消えていた。

(小松原さん。)

とあの人が、摺寄すりよつて、

(もう一つの路はどうでしょうかしら。)

と云つた、様子には出さんでも、以前の難渋は、同然に困つたらしい。

もう一つと云うのは、小川が分れて松原の裏を行ゆく、その川かわ縁りを蘆あしの根を伝い伝い、廻りにはなるが、踏切の処へ出る……

支流で、川は細いが、汐しおはこの方が余計に注さすから、どうかとは思つたものの、見す見す厭な路を繰返すよりは、

(行つて見ましよう。)

と歩行あき出して、向むきを代えて、もう構かわず、落おち水みの口を二三ヶ所、ざぶざぶ渡つて、一段踏あんで上ると、片側が蘆の茂りです。」

十六

「透かした前途ゆくてに、蘆の葉に搦からんで、一ひとすじ条白い物がすつと懸かかつた。——穂か、いやいや、変に仇あだびか光りのする様子が水らしい、水だと無駄です。

(ここにいらつしやい。)

と無駄足をさせまいため、立たせておいて、暗くならん内早くと急ぐ、跳越はねこえ、跳越え、倒れかかる蘆あしを薙なぎ立てて、近づくに従みずびたうて、一面の水だと知れて、落胆がっかりした。線路から眺めて水みず浸しの田は、ここだろう。……

が、蘆の丈でも計られる、さまで深くはない、それに汐しおが上げて
 いるんだから流れはせん。薄い水みずたまり溜たまりだ、と試みに遣やつてみ
 ると、ほんの踵かかとまで、で、下は草です。結句、泥ぬかるみ濘すべをすべるより
 楽だ。占めた、と引返しながら見ると、小高いからずっと見渡さ
 れる、いや夥おびただしい、畦あぜが十文字に組違あつた処は残らず瀬になつて
 水音を立てていた。

早や暗くなつて、この田圃たんぼにただ一人の筈はずの、あの人の影が見
 えない。

浜で手鍋てなべの時なんかは、調子に乗つて、

(お房さん。)

と呼んだりしたが、もう真しんになつて、

(おくさん
夫人！)

と慌てて呼んだ。

(はい。)と云う、厭いやに寂しい。

声を便りに駈かけ戻もどつて、蘆あしがくれなのを勇んで誘い、

(大丈夫行かれます。早くしましう、暗くなりまますから。)

誰も落着いてはいないのを、汝うぬが周章あわてて捲まく立てて、それか

ら、水にかかると、あの人ひとが、また渡わたるのか、とも言いわないで、

踏ふ込んでくれたんだ。

路みちもどうやら広ひろいから、なお力ちからになる。押お並なんで急いそいだがね。

浅あくて一面いちめんだから、見た処ところは沼ぬまの真ま中なかへ立たった姿すがたで、何なにだか幻まぼろし

の中なかを行いく、天あまの川がはでも渡わたるようようで、その時ときふとまた美うつくしい色いろが、

薄濁った水に映った——」

小松原は齒を嚙かんで言洩かつたが、

(先方さきでも、手を出した……それを曳ひこうと思つた時……)

私はぎよつとした。

つい目の前を、足に絡からんだ水よりは色の濃い、重つくるしい底そ

力ちからのあるのが、一筋、褐かばい色の鱗うろこを立ててのたつてゐるのが、

向う岸の松原で、くつきりと際立つて、橋の形が顕あらわれたんだ。

ここに、ちよいとした橋があるんだが、その勢いきおいだからもう不可いけな

い。水の上で持上つて、だぶりだぶりあおりと煽あを打つと、蘆がまた根

から穂を振つて、光来おい々々おいを極きめてるなんざ、情なさけなかうではな

いか。

しかも幅一間とは無いんだよ。

(不可^{いけ}ないのねえ。)

(駄目です、)

と言ったきり。だって口惜^{くや}しかろう。その川一^{ひとすじ}条^じの前途^{さき}は、麗々と土が出て、薄^{うす}りと霧^{きり}が這^はつて、虫の音がするんだもの。もう近いから、土手^{うで}じゃ車の音はするし、……しばらく^{にら}睨^{にら}み詰めて立^たつていた。」

医^{せんせい}師^{せい}はむくむくと起きて、平^{ひら}胡^{あぐら}坐^ざで、枕^{おとが}を頤^がに突^い支^つつて、

「いや、散々、散々、お察し申すな。」

「ところで、いつの間に来たか、ぱくぱく遣^はつてるその橋^{はし}向^{むこう}へ、犬が三疋と押寄せて、前脚を突立てたんだ。吠^ほえる、吠える

！　うう、と唸る、びようびよう齒向く。変に一面の水に響いて、心細くなるまで凄かった。

（あちらへ参りましょう、人が見ると悪いわ。）

と低声で、あの人と言う。

（なぜ。）

と思わず口へ出たが、はつと気が付いて、直ぐびちやびちやと歩行き出した。

現在犬に怪まれてあやしいるんです……漁師村を表に、この松原を裏にして、別荘があつて、時々ピアノが聞えたんで、聞きに来た事もある。……奥座敷とは余り離れないから、犬の声を變がつて、人でも出て来ると成程悪い。

が、何だか今の一言が妙に胸底へ響いて、時めいた、ために急に元氣づいて、

(一奮発遣附けましょう。)
やっつ
 と勇いさみが出た。」

十七

「その努力で、蘆の中だけは潜くぐり抜けて、旧もとの方へ引返したが、もう、暗くなって、足許は分らないで、踏むほどの場所がざぶざぶする、じよろじよろ聞える、ざんざという。田あぜだか畦おぼつだか覚おぼつ束かなく、目印ともなろうという、雑木や、川柳の生えた処は、

川筋だから轟ごうと鳴る、心細さといつたら。

川筋さえ避よけて通れば、用水に落込む事はなかつたのだが、そうこうする内、ただその飛とび々の黒い影も見えなくなつて、後は水田みずたの暗夜やみになつた。

時に……急あせつたせい、私の方が真先まつさきに二度すべに這つた、ドンと手を突いてね、はつと起上る、と一のめりに見事に這はつた。

(あれ、お危い。)

と云う人を、こつちが、

(お気を注つけなさらないと、)

この通り、ト仕方で見せて、だらしなく起たつ拍子に、あの人もずるりと足を取られた音で、あとは黙だんまり然、そら解どけがしたと見え

る、ぐい、ぐい帯を上げてるが陰気に聞えた。

気が付いて、

はきもの

(穿物を持って上げましょう、)

と注意すると、

(はい、いいえ、可ようござんす。)

と云つたが、しばらくして、

(流れてしまったようですよ。)

成程、畦あぜの切きれぐち口らしい、どっと落ちるんだ。

(飛んだ事をなさいました。)

(いいえ、どうせ荷厄介なんですもの。さあ、参りましょう。)

愚ぐ図ず々々ぐ々ずしていたので、

(可いんですよ、構やしない。)

とそれでも笑った。この方が私よりまだ元気が可い。が、私が猶予ためらったのは、駒下駄に、未練なものか。自分のなんざいつの昔失なくなくしている。——実はどちらへ踏出して可いか、方角が分らないのです。もつとも線路の見当は大概おはずに着いてたけれども、踏ふみど処ころが悪いと水田へ陥はまる。

果して遣った！ 意地にも立つたきりじや居られなくなつて、ままよ、と胆たんを据えて、つかつかと出ようとすると、見事に膝まつっこで突込んだ。

(あつ、)と抜こうとして、畦へ腰を突いたつけ、木曾殿落馬で
す。

お察し下さい、今でこそ話すが、こりや冥土へ来たのかと思つた。あの広場ひろっぱを手探りでどうするもんかね。……

背後うしろの足弱あしよわが段々呼吸いきづかいが荒くなつてね、とうとう、
（ちつと休みましょう。）

と言ひ出した。雪路以上、随分へとへとに揉抜もみぬいたから。

私は凭よっか懸かるものもなく、ぼんやり暗やみの中に立つたがね、あの人は、と思うと、目の下に、黒髪が倂おもかげ立つ。

（腰を掛けたんですか。）

（ええ、）と云う。

（濡れていましょう。）

（ええ、何ですか、瀬戸物の欠かけがざくざくして、）

私は肚胸とむねを突いたんだ。

(不可いけない！ 貴女あなた、そりや塵塚はきだめだ。)

と云う内にも、襪ぼろぎれ切や、爪うりの皮、ボオル箱の壊れたのはまだしもで、いやどうも、言おうようのない芥あくたが目に浮ぶ。

(でも水の上よりは増ましですわ。)

と断念あきらめたように、何の不足もないらしくさっぱりと言われたので、死なば諸もろともだ、と私もどつかり腰を落した。むつくり持上つて、跡は冷たい。犬の死骸じやなかるうかと、摺すりぬ抜けようとしたけれども、頬ほお擦るばかりの鬢びんの薰かおりに。……

ここで、真まことに相済まない、余計な処へ誘つたばかりで、何とも飛んだ目にお逢わせ申す、さぞ身体からだに触りましょう、汚させ、濡

れさせ、^{はだし} 跣足にさせ、夜露に打たせて……羅綾^{らりよう}にも堪えない身^か体を、^{からだ}と言おうとして、言いようがないから、

（荒い風にもお当りなさらぬ。）

とハマを言つて、ああ厭味^{いやみ}だと思つて、冷汗を掻^かいた処を、

（お人が悪いよ、子持だと思つて、）

これにまたヒヤリとしたように覚えている。」

十八

「それと同時に小児^{こども}の事が気になつて……言い出すと、女中ともう寝たろう。で、大して心配もしない様子、成程寝る時刻、九時

ちと過ぎたかも知れない。汽車が二三度上^{のほりくだり}下した。

この汽車だが……果^{はて}しの知れない暗闇^{くらやみ}の広野^{ひろの}——とてもその時の心持が、隅々まで人間の手の行届いた田圃とは思われぬ、野原か、底知れぬ穴の中途——その頼りなさも、汽車の通るのが、人里に近くって嬉しかった。それが——後^{おそろし}には可^{おおきけもの}悪い偉大な獣^{おおきけもの}が、焰^{ほのお}を吹いて唸^{うな}って来るか、と身震^{みふるい}をするまでに、なつてしまつた。

第一、足の出しようがない。それに……

もうこう夜^よも遅くなつては、何事もなく無事に家に帰るとして、ただ二人で今までなんだから、女中はじめ変に思おう。特に出征中の軍人の夫人だ。そうでもない、世間じや余計な風説^{うわさ}をしてい

る折からだから憂慮きづかわしい。

(どうでしょう。)

と甚だ言兼ねた事ではあつたが、既に——人が見ては悪いわ——と言つてくれた人だから、こう聞いた。が、その実、いいえ、人は何とも思うまい、とこの人だけに、心配をせずに居ようと期したんだ。するとちと案外で、

(さあ、私もそれが気になります。)

返事がこれで。何とも言いようがなくつて溜息ためいきが出た。あの人もほつと言う。話だけは色めかしい中に、何ともお話にならん事は、腹が、ぐうと鳴る、ああ、情なさけない何事だろう、と気にするほど、ぐうぐういう。

あの人にも聞えたか。

(お腹が空いたでしょうね。)

と来たのにや、赫かつとしたよ、但しそういう方も晩飯前です。：

：

詮方しかたがない、大声を揚げて見ようかとも言い出したが、こりや

直ぐに差留められた。勿論、お怒鳴どなんなさいと命令をされたつて、

こいつばかりは、死んでもあやまる。早い話が、何と云つて救すくいを

呼びます、助船でもないだろう、人殺し……串じょうだん戯ぢやない。

医師せんせいは聞く中うちにも笑出した。

言うものも釣込まれたが、

「今こそ苦笑いも出るけれど、……實際だ、腹のぐうぐう鳴った

時は、我ながら人間が求める糧は、なぜこう浅間しい物だろうと
つくづく
 熟々思つた。

ところで……

じゃ、何を使いりに塵塚に腰を抜いていたか、と言うに、ここも
しやば
 娑婆だから、その内には、月が出ようと空頼み、あの人も恐らく
 そうででもあつたらう、もつとも何かの拍子に、

(戦争に行つてゐる方の事を思えば、こつやつて一晚ぐらい、)
 とは言つたがね。まさか夜よの明けるまでそうして居られるもの
 とは思ふまい。

ぬかあめ
 糠雨あたまが降つて来たもの。その天窓から顔へかかるのが、塵塚

から何か出て、冷い舌の先で嘗なめるようです。

水の音は次第々々に、あるいは嘲り、あるいは罵り、中にやひとりごと
 言を云うのも交つて、人を憤り世を呪詛つた声で、見ろ、見
 ろ、汝等、水源の秘密を解せず、灌漑の恩を謝せず、名を知
 らず、水らしい水とも思わぬこの細流の威力を見よと、流れ廻
 り、駈け繞つて、黒白も分ぬ真の闇夜を縦に蹂躪る。と時々ど
 どと勝誇つて、躍上る氣勢がする。

その流れるに従うて、我が血を絞り出されるようで、堪え難い。
 次第に雨が溜るのか、水が殖えたか、投出して足許へ、縮
 めて見ても流が出来て、ちよろちよろと搦みつくつと、袖が板のよ
 うに重くなつて、塵塚に、ばしやばしやと沫が掛る、雫が落ちる。
 地鳴が轟として、ぱつと一条の焰を吐くと、峰の松が、颯と

その中に映つて、三丈ばかりの真黒な面が出た、真正面へ、
はた、と留まつたように見えて、ふつと尾が消える。

下りの終汽車らしい、と思つた時、

(あ痛、痛。)

はつと擦寄ると、あの人^まがぶるぶる震えて、

(胸が。)と云う、齒の根^まが合わない。

(冷えたんです。)

と言いながら、私もわなわなし出した。」

十九

「一生懸命の声をして、

(き、お掴つかんなさい。)

とずっと出すと、びったり額を伏せて、しっかりと膝を掴つかんだが、苦痛を堪おそえる恐おそろしい力が入って、痺しびれるばかり。

(しっかりと……しっかりと下くださいよ。)

背中を擦さすろうとした手が辻すべつて、ひやひやと後毛おくれげを潜くぐって、

柔かな襟脚さわに障さわったが、やがて水晶のように冷たいのを感じた。

その時ふつとまた、棲つまの水に映るのが、薄彩色うすさいしきして目に見え

たが、それならば、夢になろう、夢ならば、ここで覚める！

膝に倒れたのは、あの人だ。

私は猛然として、思わず抱きながら、引立てながら起上った。

(我慢なさい。こんな事をしていちや、生命にも障りましょう。血の池でも針の山でも構わず駈出して行って支度して迎に来ます。)

と声も震えながら云うと、

(一人で、どうして居られましょう、一所に。)

ツて、ぐいと袂に掴まったが、絞ると見えて水が垂つた。

(田も畦も構わない、一文字に駈け抜けるんです、怪我があると
不可ません。)

(可いの、貴下、婦は最期まで、殿方が頼りです、さ、連れて行って！)

と縫った手を、しっかりと取合つた。

(じゃ、悪魔に攫さらわれたと、断念あきらめて、目を瞑ねむつて、覚悟をして
……)

(は、瞑こりました。)

と言われたのにや、ほろりと熱い涙が出た。」

と、小松原は拳こぶしを握こつた手首をかえして、目を圧おさえて、火入とも
言わず、片手を煙草盆にはたと落した。

「考えて見れば怪しい。

はじめからその覚悟をすれば、何も冷え通るまで畦しやがに踞かんでる
にも当らず。不断見れば掌てのひらほどの、あの踏切田圃を、何に血迷つ
てたんだか、正気では分りません。いつもの幻と言ひ、おかしな
ものもてあそに弄もばれてでもいたかと思う……もつともその堪えられない

水の中でも、時々変に恍惚うっとりとなると、なぜか雲にでも乗せられたような気がする、その時は、あの人とそうしているのが嬉しかった。

畢ひつきよう 竟ひつきようずるに、言訳沢山の恋かも知れん。

その罰です。

後は御存じの通り、空を飛ぶような心持で、足も地につかず、夢中で手を曳合ひきあつて駆出かけだした処を、あつと云う間もなく、終しま汽車まいで匆はねと飛ばされた。

気が付いた時は、真まつさお蒼さおな何かの灯あかりで、がっくりとなつて、人に抱えられてる、あの人の姿を一目見たんだがね、衣きものを脱がしてあつた。ただ一ひとつか束なめらねの滑なめらかな雪で、前髪なめらと思うのが、乱れかか

つて、ただその鼻筋の通った横顔を見たばかり……乳の辺あたりに血が染にじんだ、——この方とても、御多分には漏れぬ、応挙が描いた七難の図にある通り。まだ口も利けない処を、別々に運ばれた、それが見納め。

君も知ってる、生命いのちは、あの人も助かったんだが、その後影のちを隠してしまつて、いまだに杳ようとして消息がない。

これが風説うわさの心中しそこ損ない。言訳をして、世間が信ずるくらいなら、黙おのずつていても自然おのずから明りは立つ。面と向きつて汝さまが、と云うものがないのは、君が何にも言わないと同一おんなじなんだ。

お房さんも、大方同じ考えだったものだろう。が、これは夫に顔の合わされないのは、道理です。……何も私ばかりが澄まして

活いきているのじゃない、今ここに、君とこうやっている時を、行方知れず、と思っているものもある。あの人もまた、同じように、どこかで心合いの友に、述懐をしていようも知れない。——ただもう一度逢いたいよ。」

と団扇うちわを膝につくと、額を暗うした。

医せんせい師は黙っている。

「しかし、」

と、小松原が額を上げた。

「未練だね。世間じや、誰もあの人が活いきているとは思わない。私だつて、實際生ながら存ながらえていようとは考えないが、随分その当時、表向きに騒いで、搜索さがしもしたもんだけれども、それらしい死骸も見附からないで、今まで過すぎ去さつたんだ。だから、もしやが頼まれる……

それかつて、今ここに、君の内にその人が居るから逢え、と云われたつて逢われるわけでもないんだが。」

「しかし逢いたいんだ？」

と医せんせい師は笑いながら口を入れた。

「……………」

「成程、そこで斃うなされたんだ。その令夫人に斃うなされたのは、かえ

つて望む処いげだかも知れんが、あとの泥水は厭いやだつたろう、全く氣の精もつともだな。遁出にげだしたも道理だ。よく、あの板廊下もつともが鉄道の線路に化けなかつた。」

「時に、」

小松原は、氣が着いたらしく更あらたまつて、

「あの、白骨だがね、」

と皆まで言わせず、手を掉ふつて、

「大丈夫、その令夫人の骨じやない。」

「骨じやない、」

と鸚鵡おうむがえ返しで、

「けれども、婦おんなのだと言うじやないか。何年経たつたんだか、幾十

年過ぎたんだか、知れないが、婦には変りはなからう。骨になつても小町は小町だ。

婦が、あの姿を人目に曝さらされたら、どんな心持だと思ひます——君にこんな事を云うのは、解剖室で命いのちごい乞こをするようなものだが、たとひ骨でも、一室ひとまに泊り合わせたのは、免れない縁だと思ふ。見えん処へ隠してくれんか。——私はもう、あの人が田圃で濡れた時の事を思つても、悚然ぞっとする。どうだね、可哀想かわいそうだとは思わないかね。」

「そうさな。まさか私だつて、縁日の売薬みたいに、あれを看板に懸けちや置かん、骨を拾つた気なんだから、何も品物を惜おしみはせんが、打棄うちちやつておきたまえ。そんな事を気にするのは宜よくな

いから止したが可かろう。」

「あなた
貴郎、」

と優しい声がしたので、小松原は身を縮めて、次の室の暗い中を透かした。暑いので襖は無いが、蚊帳が重ねて釣つてある。その中に、浴衣の模様が、蝶々のように掠れて見えたは細君で、しかも坐つて、紅麻に裳を寄せ、端近う坐つていた。

「何だ、起きていたのか。」

「はい、つい、あのお話しに聞惚れまして、」

と云うのに、しみりと涙が籠る。

「どうも、」

とばかりで、小松原は額を压えた。医師は事も無げに、

「聞いたのは構わんよ、沢山泣いて上げる。だが、そこらへ溢こぼしちゃ不可いかんぜ、水が出ると大変だ。」

「あれ、可いや厭やな。」

「馬鹿だな、臆病。」

「だって、」

と蚊帳の裾を引被ひつかつぐ、腕かひなが白く、扱帯しごきの紅くれなゐが透いた時、わつと小児こどもが泣いたので、

「おお。」

と云つて添臥そいぶしたが、二人も黙る内、すやすやとまた寝入った。

「ねえ、貴郎あなた、そうして、小松原さんのおっしやる通りになさい

よ。何だか可こ恐わいんですもの。」

と弄かうごとく、団扇を膝でくるりと遣る。

「いいえ、ですがね、あの御骨……」

「ちよつと待て、御骨は気になる。はははは。」

「御免なさいませよ。」

と客に云つて、細君は、小兒に添乳の胸白く、搔卷長う、半

ば起きて、

「串戯ではなかつてよ。貴郎が持つて来て、あそこへ据えて

から、玄関の方なんぞも、この間中種々な事を言つてるんですよ。

話声がするの、蹺音が聞えるのつて——大方女中なんかを徒

に威すんだらうと思つて、気にもしないでいましたけれども、今

のお話の様子だと、何だか、どうとも言えませんわ。」

二十一

「ねえ、小松原さん、」

とぼかしたような顔が、蚊帳の中で朧おぼろに動いて、

「あの御骨おこつだつて、水に縁があるんですもの。」

「婦女子の言です。」

と医せんせい師は横を向く。小松原は、片手を敷布の上、隣室となりへ摺寄すりよる身構えで、

「水に縁と……仰おつしや有ると？」

「あれは貴下あなた、何ですわ、つい近い頃、夫やどが拾つて来て、あすこ

へ飾ったんですがね。その何ですよ、旧もとあつた処は沼なんですつて。」

「沼！」

「おつと直ぐに、そう目の色を変えるから困る。鯰なますに網を打ちはしまいし、誰が沼の中から、掬すくい上げるもんか。」

「だって、そりや沼からじやありますまいけれど、梅雨あけに水が殖ふえたので、底から流ながれ出したんだらうツて、貴郎あなたがそう言つていらしたではありませんか。——小松原さん、この梅雨あけにも田圃へ水が出ましてね、先刻さつきおつしやいました、踏切の前の橋も落ちたんですよ。蒼沼あおぬまが溢あふれたんですつて、田圃の用水は、皆みんなそこから来るんだつて申します……

その近処の病家へ行ききました時に、其家の作男が、沼を通りがかりに見て来たつて、話したもんですから、夫が貴下、好事にその男を連れて帰りがけに、廻道をして、内の車夫に手伝わして、拾つて来たんですわ。

御骨は、沼の縁に柔な泥の中にありましたつて、どこも不足しないで、手足も頭も繋つて、膝を屈めるようにしていたんだそうです。」

「妄誕臆説！」

と称えて、肩を一つ団扇で敲く。

「臆説つて、貴下がお話しなすつた癖に。そうしてこう骨になつてから、全体具つているのは、何でも非常な別嬪に違いない。」

何骨とか言つて、仏家では菩薩ぼさつの化身とさえしてある。……第一
膝を折つた身みだしなみ躡なみの可いい処いを見ろツて、さんざん効能を言つた
ではありませんか。」

と、もう小兒こどもも寝たので、搔卷かまきりからするりと出て棲しを合わせる。
醫師せんせい喟然きぜんとして、

「宜よろしく頼む。あとは君にまかせるから、二人して、あの骨をそ
の人だとても何とでも御意ぎよいなさい、こちらへ来て講中こうちゆうにならんか
。」

と笑いながら、むずと蚊帳ぶんぢやうを出て、廊下らうげへ寝衣ねまきで突立つったつた。
が横向こうむうに隣りんを見て、

「何だ、お前ちやうずも手水てすいか。馬鹿ばかな、今の話しで不気味ふきみだからつて。

お客様の居る処を、連立つて便所へ行く奴があるかい。」

と言う。

小松原が、ト透^{すか}すと、二重^{ふたえ}遮^{ほのか}つて仄^{ほのか}ではあるが、細君は蚊帳の中を動かずにいたのである。

「貴郎^{あなた}、」

とこの時、細君の声は、果^{かな}せる哉^{いた}、太^{いた}く震^{いた}えて、

「貴郎……」

「うむ、」

小松原も蚊帳の中に悚^{ぞっ}然^{ぞっ}として、

「酒田。」

と変な声をする。

「誰か居ますか。」

「おお……」

と医師せんせいは、蹠よろ踏たけたように、雨戸うしろを背そに、此方こなたを向き替え、斜とがりめに隣室となりの蚊帳のぞを覗のぞいた。

「私はここに居ますんですよ。」

「誰だ、今のは？」

うっかり医師せんせいが言うや否や……

「厭いや……」

と立つて、ふらふらと、浅黄あきに白地しろで蚊帳くぐを潜くぐると、裙すそと裙すそとにぱつと挟くまる、と蜘蛛くもの巣すに掛かつたように見えたが、一つ煽あおつて、すつと瘦やせたようになって、此方こなたの蚊帳くぐへ——廊下りやうかに事はあ

るものを、夫を力にそこへは出られぬ——腰を細く、乗るばかり、胸に縋すがった手が白く、小松原の膝にしがみついた。

——この状さまを……後に、医学士が人に語る。——

「蒼あおぬま沼の水は可恐おそろしい、人をして不倫の恋をなさしむるかど、私は嫉ねたもうとした。」

二十二

その時せんせい医師は肩を昂あげて、

「雨かな。」

と仰あおむ向けになつたが、また、俯うつむ向いて胸を払つた。

「何だ、廊下は水だらけだ。」

細君は何にも言わぬ。小松原も居い窘すくまって、忙せわしく息をするばかり。

鶏とりが鳴いたので、やっと細君が顔を上げたが、廊下に突つ立たった夫を見た時、聞耳を立てて、

「何です……がたがた、がたがた言つて、」

小松原が、

「あ、」

「あれか、」

と医師せんせいもそこで聞取つた。

「酒田……先刻さつきのも、」

「むむ、診察処だ。」

「あれえ。」

「開けて見ると何にも居ないのだ。が、待てよ。」

と言つて、蚊帳の周囲まわりをぐるりと半分、床の間をがたりと遣やると、何か提ひげた、その一腰、片手に洋燈ランプを翳かしたので、黒塗くろぬりの鞆さやが、袖をせめて、つらりと光つた。

「危あい、貴郎あなた、」

「大丈夫だ。」

「いいえ、」

細君は一声、誰かを呼んで、

「玄関の方を起して下さい、正吉——」

もうせんせい医師の姿はなかつた。

ばたん、とひらき扉の開いた音。

二人が揃つて、蚊帳の中を廊下際で、並んで雨宿りをする姿で立つた処へ、今度はしずか静に悠々と取つて返す。

「どうした。」

すつぽん
「鼈だ。」

「え。」

「鼈がみつつ三個よ。」

「どこに、ですえ。」

と細君は齒の音も合わぬ。

せんせい
医師は真面目な顔して、

「場所はちと悪い、白いものの前だ。」

「あれ。」

「さぞまた蒼沼から、迎むかえに来たと言うだろうなあ。」

と雨戸を一枚、颯さつと風が入って、押伏おっぷせて、そこに置いた洋燈ランプが消えた。

が、鶏がまた鳴いて、台所で誰か起きた。

白骨もとが旧もとの沼へと立返ることになって、この使者は、言うまで

もなく小松原が望んで出た。一夜の縁ひとよえにしのみならず、そこは、自分

とあの人とがために浮名を流した、浜田の水の源みなもとぞと聞くからに、

顔を知らぬ許いいなずけ婚けに初めて逢ゆいに行く気もすれば、神仙の園へ

招待されたようでもあって、いぎ、立出たちいづる門口から、早や天の

一方に、蒼沼の名にし負う、緑の池の水の色、峰続きの松の梢に、
ほうふつ髣髴としてるり瑠璃をたた湛える。

その心は色に出て、せんせい医師は小松原一人は遣らなかつた。道し
 るべかたがた、かいぞえ介添に附いたのは、正吉と云うわか壮い車夫。

国手お抱えの車夫とあると、ちよいと聞きにはきおい侠勇らしいが、
 いや、山育ちのじねんじよう自然生、大の浄土宗。

お萩がすき好の酒嫌いで、地震の歌の、六ツ八ツならばおおかせ大風から、
かね七ツ金ぞと五水りようあれ、を心得て口癖にする。えら豪いのは、旅
しゆぎようじゃの修行者の直伝とあつて、『こそたくまやたく姑蘇啄麻耶啄』とじゆ呪していぼほ疣
くろ黒子を抜くという、使いがらもつて来いの人物。

これが、例の戸棚掛のしろぬの白布を、直ぐに使つて一包み、昨夜の

一刀を上のに載せて、も一つ白布で本包みにしたのを、薄々沙汰は知つていながら、信心堅固で、怯び気くともしないで、一件を小脇に抱える。

この腰の物は、魔除まよけに、と云う細君の心こころ添ぞえで。細君は、白骨も戻すと極きまり、夜が明けると、ぱつと朝露に開いた風情に元氣になつて、洗面の世話をしながら、縁側で、向うの峰を見て顔を洗う小松原に、

「昨晚たのしはお楽たのしみ……なぜつて。まあ、憎らしい。奥さんが逢いにいらつしやつたではありませんか。」

など遣つたものだが、あえてこれは冷評ひやかしたのではない。その証拠には、小松原と一足違ちがいに内を出て、女子扇おんなと御経料を帯に挟

んで、じりじりと蟬の鳴く路を、
 某なにがし寺へ。供養のため――

二十三

「沼さ行く道はこれに入るだよ。」

と正吉が言う処を、立直つて見れば、村の故道ふるみちを横へ切れる
 細い路。次第高だかの棚田に架かつて、峰かからなぞえに此方こなたへ低い。田
 の青さと、茂こつた樹立こたちの間を透かいて、六月みなづきの空は藍あゐよりも蒼あおく、
 日は海の方へ廻うしろつて、背後うしろから赫かと当あるが、ここからは早や冷い
 水へ入るよう。

三方、山の尾が迫おおいつた、一方はかえでこずえ大なる楓の梢へ、青田の波が越

すばかり。それから青^{あお} 芒^{すすき}の線を延^のびして、左へ離れた一方に、
 一^{ひと}叢^{むら}立^{だち}の藪^{やぶ}があつて、夏中日も当てまい陰暗く、涼しさは緑の
 風を雲の峰のごとく、さと揺^{ゆり}出^だし、揺出^{ゆりだ}す。その上に、萱^{かや}で包^かん
 だ山が見えたが、遠いと覺しく、峰の松が、鹿の^たたず^た姿に小^ちさ
 い。藪に続いた一方は雑木林で、颯^{さつ}と黒髪^{くろかみ}を捌^さいたごとく、梢^{うら}が
 乱れ、根が茂る。

路はその雑木の中に出つ入りつ、糸を引いて枝折^{しおり}にした形に入
 る……赤土の隙間^{すきま}なく、凹^{くぼ}みに^み陰ある、樹^{した}の下^{やみ} 闇^{くろ}の鱗^{ひづめ}爪^{つめ}の跡、馬
 は節々通うらしいが、処^{ところ}がら、竜^{たつ}の鱗^{うろこ}を踏むと思えば、鼈^{すつぽん}の足^{あし}
 痕^{あと}を辿^{たど}るよとも疑^{うたが}われた。

次第に山の裾を分け上ると、件^{くだん}の楓を左の方に低く視^{なが}めて、右

へ折曲おりまがつてもう一谷戸ひとやと、雑木の中を奥へ入ろうとする処の、山やままふところ
 懐なつかの土が崩れて、目の下の田までは落ちず、径こみちの端はしに、抜けた岩ごと泥うずたかが堆たかかった。

「沼はこの先でがんす。」

と正吉せいきは前へ立たつた。……山崩れで、ここに路の切れたのも、何となく浮世を隔へてた、意味ありげにぞ領うなずかるる。

「梅雨あけに、医せんせい師しと、この骨ほねさ拾ひろいに来きつけ。そんなころの雨に緩ゆるんだだね。腕くるま車ぐるまもはい、持も立たてるようにしてここまでは曳ひいて来ただが、前さきあ挺てこでも動うごきましねえでね。」

と言う。

このあたり……どこかで何の鳥か一つ鳴出した。何な、正ま体あを見

れば、閑古鳥にしろ、直じきそこいらの樹の枝か葉隠れに、翼を搔か込こんだのが、けろりとした目で、閑ひまに任まかして、退屈まぎれに独ひとり言ごとを言っているのであるうけれども、心あつて聞く者が、その境に臨むと、山から谷、穴の中の蟻ありまでが耳を澄ます、微妙な天樂であるごとく、唳り々りとして調べ奏かなでる。

……きよ、きよら、くらら、くららつ！

と転がして、発奮はずみかかつて、ちよいと留めて、一つ撓ためておいて、ゆらりと振って放す時、得も言われず銀鈴こたまが跗こたに響く。

小松原は、魂を取って扱しじかれるほど、ひしひしと身に堪こたえ、

「……京から、今日ら……来るか、来るか！」

と言われるようで、

「来ました、東京から今日来ましたよ。」

と胸の裡で言つた。

その蒼沼は……

小高い丘に、谷から築き上げた位置になつて、対岸へ山の青
 簾、青葉若葉の緑の中に、この細路を通した処に、冷い風が面
 を打つて、爪先寒う湛えたのである。

水の面は秋の空、汀に蘆の根が透く辺りは、薄濁りに濁つて、
 二葉三葉折れながら葉ばかりの菖蒲の伸びた蔭は、どんよりと白
 い。木の葉も、ぱらぱらと散り浮いて、ぬらぬらと蓴菜の蔓が、
 水筋を這い廻る——空は、と見ると、覆かかるほどの樹立はない
 が、峰が、三方から寄合うて、遠方は遠方なりに遮つて、池の

周囲まわりと同じ程より、多くは天そらを余あさぬから、押お包つつんだ山の緑に
 藍あゐを累かさねて、日なく月なく星もなく、倒さかに沼の中心に影が澄あんで、
 そこにこそ、蒼沼の名に聞ゆる威い嚴げんをこそ備そえたれ。何となく涸か
 れて荒すさびて、主ぬしやあらん、その、主の留守の物寂さびしい。

二十四

濃い緑の雑樹の中へも、枝なりにひらひらと日の光が折おれ込んで、
 縁ふちを浅黄あさぎに、木この葉を照てらす。この影に、人あは蒼あお白しろく一息した。
 なぜか、葬とむらい礼らいの式しきに列つらなつたようで、二人とも多く口数くちずも利か
 なかつたが、やがて煙草たばこも喫のまないで、小松原つくばは踞くつた正吉しやうきちを顧

みて、

「どこで拾ったね。」

「やあ、それだがね……先刻さつきから氣い付けるだか、どうも勝手が違つたぞよ。たしか、そこだつくと勘考します、それ、その隅つこの、こんもり高だかな処とこさ、見さつせいまし、己おらあ押魂おつたまげ消ただ。その節あんな芭蕉ばしやうはなかつけ。」

と言う。

目覚しいのは、そこに生えた、森あざむを欺くような水芭蕉で、沼の片隅から真蒼まつさおな柱を立てて、峰を割り空を裂いて、ばさばさと影を落す。ものの十丈もあろうと見えて、あたかもこの蒼沼さつに颯さつと萌黄もえぎの窓帷カアテンを掛けて、倒さかさに裾すそを開いたような、沼の名は、あ

るいはこれあるがためかとも思われた。

正吉が知らずと云う、梅雨あけの頃は、まだ丈伸びぬ時節であるから、今日見付けたのを、訝いぶかしむ仔細しさいは無い。

さて、家を出る時から、拾った場所へ旧もとの通り差置こうというではなく、ともあれ、沼の底へ葬り返そうとしたのであるが、いざ、となると汀みぎわが浅い、ト白骨あばらは肋あばらの数も隠されず、蝶々蜻蛉とんぼの影はよし、鳥の糞ふんにも汚けがされよう。勢い諸手高く差さしか翳かざして、えい！ と中心へ投込まねばならぬとなつた。

「そんな事が出来るものか。」

と小松原が猶ためら予うと、

「成程、へい、手荒だね。」

と正吉さえ頷くのである。

ここで、小松原が心着いたのは、その芭蕉で……

「まあ、それを解け。」

と手伝つて、上包の結目を解くと、ずしりと圧にある刀を取ったが、そのまま、するりと抜きかける。——虹のごとく、葉を漏る日の光に輝くや否や、

「わッ！」

と正吉が飛退った。途端に白布の包は、草に乗つて一つ動く。

「旦那、氣い確に持たつせえ。」

昨夜からの小松原の容子は、まったく人目には変だった。これ

は気が違つた、と慌てたらしい。

やがて孫呉空そんごくうが雲の上を曳えい々えい声こゑで引背負ひきおつたほどな芭蕉を一枚、ずるずると切出すと、芬ぶんと真ま蒼さな香かほが樹いの中に籠こもつて、草の上を引いて来たが——全身引ひくるまひつて乗のつかつた程ほどに大おほいのである。

小松原は莞爾にこにこ々々しながら、

「さあ、これへ乗せよう。」

まざまざと見るには堪こえぬから、その布ぬで包くんだまま、ただ結むす目を解といただけで、密そつと取とつて、骨ほねを広葉ひろはの只ただ中なかへ。

葉先みぎわを汀あしずへ、蘆あし摺ずれに水みづへ離はせば、ざわざわと音がして、ずるりとすべとすべる、柄えいを向むかうへ……

「南無阿弥陀 南無阿弥陀。」

と殊勝に正吉が、せめ念仏で畳掛けるに連れて、裂目が鱭ひれのよ
うに水を捌さばいて行く、と小波ささなみが立って、後を送って、やがて沼
の中ばに、静じつと留まる。

そのまま葉が垂れると、縋すがりつく状さまに、きらきらと水が乗る、
と解けるともなしに柔かに、ほろほろと布が弛ゆるんで、細長い包み
の裾が、ふツくりと胸になり、婦おんなが臥ふした姿になる。

思出して、はつと目を塞ふさいだが、やがて見れば、もう沈んだ。

途端に、ざらざらと樹が鳴って、風が走る。そよ風が小波立て
て、沼の上を千条百条網の目を絞って掛寄せ掛寄せ、沈んだ跡
へ揺ゆりかけると、水鳥が衝つと蹴けたごとく、芭蕉の広葉は向うの汀みぎわへ、

するすると小さく片寄る。

二十五

……きよ、きよら、きよきよら、くららっ！……

と、しばらくはただ鳥の声。

熟^{じつ}と沼^{おも}の面^{おも}を見ていると、どこかに、その人の顔がある。が、水の皺^{しわ}が揺^ゆつては消し揺^ゆつては消す——そうかと思うと、その水紋^{ゆら}の揺^ゆめく綾^{あや}が、ちらちらと目になって、瞳^{まなこ}が流るるようでもある。ソレ鼻、ソレ口、と思う処^{ところ}が、ふらふらと浮いて来ては、仰^あ向け^{おもむ}に沈^おんで消える。もうちつとで、もうちつとで……と乗出^{のりだ}す

けれども、もうちつとで絡まとらない。

急あせつて、跪まがいて、立ったり居たり、汀みぎわもそちこち、場所を變え

てうろついて見込んだが、ふと心づいてみまわせば、早や何が染そまるでもなく、緑は緑、青は青で、樹の間は薄暮うすくれあい合。

「旦那もう晩方だよ。」

と云つて、正吉が帰途を促ささがしたのは余程やさぎの前で、それを、無理遣りに一人帰してからさえ、早や久しい。

ひとり

独になつて、思うさま、胸にたたんだ空想に耽ふけろうと、待構まちえたのはこれからと、まず、ゆつくり腰を卸おろして、衣紋えもんまで直して、それから横になつて見たり、起返つて見たり。

とかくして沼の中を、身動きもしないで覗のぞきこ込んだ……

あわれ水よ、おおい偉なる宇宙を三分して、その一を有する汝、なんじ瀬となり、滝となり、ふち淵となり、目まのあたり我が怪しき恋となりぬ。いで、霧となつて虹にじを放ち、露と凝つて珠ともなる。ここに白骨を包んでは、その雪のごときはだえ膚とならずや、あの濡れたような瞳とならずや。

と思ひ思う、まさしく、そこに、みなそこ水底へ、意中の夫人が、黒髪長くかかつて見ゆる。

見ようとすると、水が動く。いや、いや、我が心の動いために、人の姿が散るのである。

胸を打つて、襟つかを掴んで、のど咽喉をせめて、思ひとところいを一処へに凝らそうとすれば、なおぞ、ちぢ千々に乱れる、碎ける。いつそ諸共に

水底へ。

が、たしか確にその人が居ようか怪しい。……いや、まさしく、そこに、いまし葬った骨がある。骨はたしか確に……確に骨は、夫人がここに身を投じて、朽ちず、消えず、砕けぬ——白きさんご珊瑚の玉なす枝を、我がために残したことは、人にこそ言わね、昨夜よりゆうべ我は信じて疑わぬ。

何が不足で一所に死ねぬ——

「その肉身か。」

おのと己がずはつ頭髮をつか掴んで、宙に下がるばかりつった突立った。

「卑ひきよう怯だ、此こいつ奴！ 始はじめからそれは求めぬちかい誓であつた。またそれを求むる位なら、なぜ、行方も知れずとら捉うる影なきその人を、か

くまで慕う。忘れられぬはその靈こころであろう。……その靈は、そこにある、現在骨まである。何が、何が不足で飛込めない。

肉身か、あるいはそれもある。沼の水は、すなわち骨を包むはだ膚、
おぼ溺れて水を吸うは、なおその人の唇に触れるに違たがわん！」

入れ、入れ、入れ、さあさあさあさあ、と水が引き引き、ざわ
 ざわと蘆あしを誘つて、沼の真まん中なかへ引寄せる。

小松原は立つたまま地ちだんだを踏んだが、

「ええ！ 腑ふ効がいない。」

どっかり草へ。

蘆の葉末はづえに水を載のせて、昼の月の浮いて映るがごとく、沼のそ
 こに、腕かいか、肩か、胸か、乳か、白々と漾ただよい居る。

ソレソレ手に取るばかり、その人が、と思いながら、投出して見ても足がまだ水へは達かぬ。

何をか疑い、何をか猶予う。

あまり

余の事に、ここへ来るは今日には限らないと思切つて、はじめぞつて悚然として、帰ろうとして、骨を送つた船の漾う処を視むれば、四五本打つた、杭の根に留つたが、その杭から、友染の切を流した風情で、黄昏を翡翠が一羽。

二十六

それをこう視めた時、いつもとろとろと、眠りかけの、あの草

の上、樹の下に、美しい色の水を見る、描いたるとき夢幻の境、前世か、後世か、ある処の一面の絵の景色が、彩色した影のごとくに浮んだので、ああ、このままここへ寝るかも知れない。

それも可^{よし}、ままよ、なるようになれとなつた。……

その内に、翡翠^{かわせみ}の背らしいのが、向うで、ぼつと大きくなり、従つて輪郭^{りんかく}は臃^{おぼろ}になつたが、大きくなつたのは近づくので、臃になるのは、山から沼の上を暮増^{くれまさ}るのである。その暮れるのと、来かかるのが、蘆^{あし}の汀^{みぎわ}を段々^{あし}伝いに、そよそよと風に、背後^{うしろ}を、吹かれ、送られ、近づいて、何の音^{あしおと}も聞えなかつたが、上^{かみ}からか下^{しも}からか、小松原の目に、婦^{おんな}の色ある衣^{きぬ}の裾^{すそ}が見えて、傍^{かたわら}に来て、しつとり留^{とま}る。……

「奥さん。」

と、我知らず叫んだが、はつと気が附いても枕はしていず、この時は、診察室の寝台ねだいでなかつた。そこで、

「……………」

誰かが何か言う。ただ赫かつとして、初手のは分らなかつた。瞳を凝らして、そのすつと通つた鼻筋と、睫毛まつげが黒く下向にそこたたずに、
んだのを見出みいだした時、

「立二さん。」

と胸を抱いた手が白く、よくは分らぬけれども、着たものの柄にも因よるか、しばらくの間に、やや太ふとり肉じしだった人が、げっそりと瘦やせて小さくなつた。

「おお！」

とばかりで、肩で呼吸いきして、草に胡坐あくらしたまま、己が膝を引ひつつ搦かんで、せいせい言つて唇を震わす。

上では、俯向きうつむさまに、髪が揺れたが、唇の色が燃え、得も言われぬ微笑ほほえみして、

「変つた処で……あんまりだから、お化だと思つてしよう。」
と相変らずしとやかなものの言いよう哉や。

それどころか、お化……なら、お化で、またその人ならその人で、言いたいことが一切経、ありつたけの本箱を引ひつくり返したのと、知つただけの言ことばを大おお絡まとめにしたのが、一いち斉どきに胸へ込上げ、咽喉のどで支つかえて、ぎゆうとも言えず、口は開あかず、目は動く。

「それでも、」

と鬢びんへちよいと手を遣やつたが、櫛くし、笄こうがかんざし、簪かんざし、リボン、一ツもそんなものは目に入らなかつた。

「まさか、墓へは連れて行ゆかないから、私の許とこへ御一所に。」

指ゆびさして、指の先で、男が只ひたみは瞻りに瞻つた瞳を、沼の片隅に墨で築ついた芭蕉の蔭へ、触つて瞬かせるまで、動かさせて、

「あすこを通つて、岨そば伝つたいに出られる里。……立さん、そんなに吃驚びつくりなさらないでも、貴下あなたが昨日、お医師いしや様の許とこへおいでなすつた事は、私もう知つています。

いつかの時の怪我けがでねえ、まだ時々、時候の変わり目に悩みますから、梅雨時分、あのお医師様にお世話になつたの、……私のね、

今隠れている百姓屋へ来て貰つて……

立さんが、先刻さつき葬おとむらい式しきにいらした、この沼の白骨も、その

時私の許で聞いて、あの方がここへ来て拾つて行つたんです。

この頃、また、ちつと塩あんばい梅うめが悪いので、医師いしやへ通つています

から、今日こちらへお出でなさる事も、貴下がお出掛けの直ぐあとへ行つて聞いて来ました。

先刻さつきから、あちこちで、様子を見ていましたけれども、傍そばに人が居るから、見られるのが可厭いやで来ませんでしたよ。

さあ、いらつしやい。」

「……参ります！」

とだけは決然として気競きおつて云つたが、膝ひざが萎なえて、がくつい

て、ついした事には行かないで、

「貴女、貴女、」

とばかり言う。

「まあ、何にもおつしやらないで。何事も、あの、内へ行つてから、ゆっくりお話をしましょうね。」

と軽く頷く、うなず頬がつくと、襟の処が薄く曇つて、きらきらと露が落ちた。

二十七

その涙を払う状に、さま四辺を見つ、あたり

「御覧なさい、可厭いやな。どこより前さきに、沼の上が暗くなりました。これが、あの田の水の源もとなんですもの。またいつかの時のような事があつては悪い。」

と調子はおつとり聞こえたが、これを耳にすると齊ひとしく、立二は焼火箸やけひばしを嚙のんだように突立つたつた。

ト、佳いい薰かおりが、すつと横を抜けて通つて、そのまま後姿で前へ立つて、尋常みぎわに汀ゆを行く。……お太鼓の帯腰が、弱々と、空から釣つたように、軽く、且つ薄い。

そこへ、はらはらとかかる白絹しろろの袂たもとに、魂を結びつけられたか、と思うと、筋骨すじぼねのこんがらかつて、捌さばのつかないほど、揉もみ立てられた身体からだが、自然あるに歩行く。……足はどこを踏んだか覚えな

し。

しばらく行くと、その人が、偶と立停つて、弱腰を捻じて、肩へ、横顔で見返つて、

「気をつけて頂戴、沼の切れ目よ。」

と案内する……処に……丸木橋が、斧の柄の朽ちた体に、ほろりと中絶えがして折込んだ上を、水が糸のように浅く走つて、おのれ、化ける水の癖に、ちよろちよると可憐やか。ここには葉ばかりでなく、後れ咲か、返り花が、月に咲いたる風情を見よ、と紫の霧を吐いて、杜若が二三輪、ぱつと花弁を向けた。その山の端に月が出た。

「今夜は私が、」

すつと跨ぐ、色が、紫に奪われて、杜若に裾が消えたが、花から抜ける捌いた裳が、橋の向うで納まると、直ぐに此方へ向替えて、

「手を引いて上げましょう。」

婀娜なよやかに出されたので、ついその、伸せば達く、手を取られる。

その手が消えたそうに我を忘れて、可懐なつかしい薫かおりに包まれた。

まだ耳の底に絶えなかつた、あの、きよ、きよら、くらら鳥の聲が、この時急に変わった。野太く、図抜けた、ぼやつとした、のろまな、しかも悪く底響きのするのに変つて、

……おのれら！ おのれら！……

と鳴く。

ぎよつとして、仰いで見る、月影に、森なす大芭蕉おおばしょうの葉の、沼ぬきの上へ擻ぬきんでたのが、峰のしだから伸出のしだいて覗のぞくかと、頭かしらに高う、さながら馬たてがみの鬣たてがみのごとく、譬たとえば長髪を乱たていした体の、ばさとある附つけもと
元は、どうやら瘦やせこけた蒼黒あおぐろい、尖とがつた頤おとがいらしくもある。
あれあれ裂けた処が、そつくり口で、

……おのれら！……

とまた鳴いた。その体ていは……薄汚れた青竹ふとづえの太杖ふとづえを突いて、破やぶれめ目の目立つ、蒼黒い道服ちやくを着ちやくに及んで、丈高せいう跳のさばって、天上みおろから瞰下みおろしながら、ひしやげた腹から野良声のらこゑを振絞しぼって、道教たうきやううる仙人せんじんのように見えた。

その葉が大きく上にかぶさる、下たたずに亘わたんで熟じつと見た、瞳うろが霑うるん

で溜息ためいきして、

「立さん、立さん、」

と手を取ったまま、励ますように呼掛けて、

「憎らしいではありませんか。あの芭蕉が伸拡がって、沼の上へ押覆おつかぶさるもんですから、御覧なさい。出汐でしおをこうして隠すんですもの。空へ上れば峰のびへ伸る、向うへかかれば海へ落ちて、いつ見ても、この水に、月の影が宿りません。」

可哀相に。いつかの、あの時、月の影さえ見えたらばと、どんなに二人で祈ったでしょう。身につまされて涙が出る。まあ、この沼の暗いこと！ 外は、あんなに月夜だのに。……」

翳かざせばその手に、山も峰も映りそう。遠い樹立は花かと散り、

頬に影さす緑の葉は、一枚ごとに黄金きんの覆輪ふくりんをかけたる色して、
 草の露と相照らす。……沼は、と見れば、ここからは一面の琵琶びわ
 を中空に据えたようで、蘆あしの葉摺はすれに、りんりんと鳴りそうなが
 ら、一ひとすじ条白銀しろがねの糸も掛からず、暗々として漆して鼠ねずが駈かけまわ廻り
 そうである。

「先刻さつき、貴下あなたがなすつたついでに、もうちつと切払つて下されば
 可よかつたのねえ。」

ただ等閑なおよざりに言い棄てたが、小松原は思わず拳こぶしを握つた。生れ
 て以来このかた、かよわきこの女によし性しょうに對して、男性の意氣と力をい
 まだかつて一たびもために露あわし得た覚おぼえがない。腑効ふがいなさもその
 ドン詰づまりに……

しや！ 要こそあれ。

今も不思議に片手に持った、鞘さやを棄てて、提ひっさげて衝と出たが、屹きつと見上げて、

「おのれ！」

と横よこ薙なぎ、刃やいばが抜けると、そのもの、長髪をざつと捌さばく。驚破すわあたまあたまから押潰おしつぶすよと、思うに肖にず、二丈ふたたけばかりの仙人先生、ぐしやと挫ひしげて、ぴしやりとのめずる。

これにぞ、氣を得て、返す刀、列位の黒道人くろどうじんに切附きりつけると、がさりと葉尖はさきから崩れて来て、蚊帳を畳んだように落ちる。同時に前へ壁を築ついて、すつくと立つ青仙人を、腰車こしぐるまに斬きつて落す。おがみうちおがみうち、輪切わぎり、袈裟掛けさがけ、はて、我ながら、氣が冴さえ、手が冴え、

拜打おがみうち、輪切わぎり、袈裟掛けさがけ、はて、我ながら、氣が冴さえ、手が冴え、

白刃しらばとともに、抜けつ潜りくぐつ、刎越えはねこ、飛び交い、八面に渡つて、
 薙立なぎたて薙立なぎたて、切伏せると、ばさばさと倒れるごとに、およそ一ひ
とはば幅の黒い影が、山の腹へひらひらと映つて、煙が分れたように
 消える、とそこだけ、はつと月が射さして、芭蕉のあとを、明るく
 なる。

果はては丘のごとく、葉を累かさねた芭蕉の上に、全身緑の露を浴び、
 白刃に青き雫しずくを流して、逆手さかてに支ついてほつと息する。
 棲取りながら、そこへ来て、その人が肩を並べた。

白刃を落して、その時腕かいなをさすつて憩う、小松原の手を取つて、
 「ああ、嬉しい。」

と、山の端出はいでたる月に向つて、心ゆくばかり打仰いだ。背せ撓たわ

み、胸の反るまで、影を飲み光を吸うよう、二つ三つ息を引くと、見る見る衣きぬの上へ膚はだえが透き、真白な乳ちが膨らむは、輝く玉が入ると見えて、肩を伝い、腕かいなめぐを繞り、遍く身内の血と一所に、月の光が行通れば、晃々きらきらと裳もすそが揺れて、両の足の爪つまさき先に、美しい綾うつくしあやが立ち、月が小波ささなみを渡るように、滑なめらかに襷ひだを打った。

あなや
啊呀と思うと、自分の足は、草も土も踏んではおらず、沼の中なる水の上。

今はこうと、まだ消え果てぬ夫人すがに縋すがると、靡なびくや黒髪くろかみ、澆ぼつと薫かかつて、冷つめたく、涼すずしく、たらたらと腕かかに掛かかる。

………小松原は、俯うつむ向けに蒼沼あさぬまに落ちた処ところを、帰宅かえりのほどが

遅いので、医師せんせいが見せに寄越よこしした、正吉に救われた。

車夫は沼の隅の物音に、提灯ちようちんを差出したが、芭蕉の森に白刃が走る月影に恐おそれをなして、しばらく様子を見ていたと言う。

小松原が恢復かいふくして、この話をした時、医学士は盃を挙げて言
つた。

「昔だと、仏門に入る処だが、君は哲学を学やつとる人だから、それにも及ぶまい。しかし、蒼沼は可怪あやしいな。」

明治四十一（一九〇八）年六月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一卷」岩波書店

1941（昭和16）年8月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年3月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

沼夫人

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>